

南フランス・ロゼール県南部の中世ロマネスク聖堂（3）

中川久嗣

Les Églises Romanes dans le Département de la Lozère; Les Cévennes et La Vallée Française.

NAKAGAWA Hisashi

Résumé

À la suite de la monographie précédente, je traite ici les églises, les abbayes et les prieurés de l'époque romane ou du style roman qui se trouvent au sud du département de la Lozère, surtout dans les Cévennes et la Vallée Française. Par exemple, les communes comme Barres-des-Cévennes, Le Pompidou, Sainte-Croix-Vallée-Française et Moissac-Vallée-Française, etc. Ce pays correspond approximativement à l'ancienne baronnie de Florac et d'Anduze au moyen âge. Sur chacune de ces églises, j'analyse son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures, et ses décorations, etc.

本稿では、前稿（「南フランス・ロゼール県南部の中世ロマネスク聖堂（2）」）に引き続き、ロゼール県の南部に点在するロマネスク聖堂を取り上げる。具体的には、ロゼール県南東部のフロラック（Florac）周辺地域から、いわゆるセヴェンヌの山々やヴァル・フランセーズと呼ばれる渓谷沿いに点在する中世期のロマネスク聖堂を対象とし、可能な限り知りうるものすべてを訪問調査し考察を加える。

この地域は、中世にはジェヴォーダンを支配した8つのバロニー（男爵領）のうちの「フロラック男爵領」（baronnie de Florac）にあたり、もっぱらアンデューズ（Anduze）の領主一族の支配下にあった。ジェヴォーダンに割拠していたこうしたバロニー族は、それぞれの支配領域において拠点となる城塞を築いて強力な統治を行い、さらに支配領域内の教会に対しても司教や修道院長などに一族の者を送り込んだり、あるいは土地や財産を寄進するなどしてその影響力を維持していた。

セヴェンヌの地は、18世紀初めに起こった「カミザール戦争」（またはカミザールの乱、セ

ヴェンヌ戦争など）と呼ばれるフランス・プロテスタント（ユグノー）の反乱の血なまぐさい舞台ともなったことで知られる。その当時ラングドック総督のもとでセヴェンヌ地方の布教監督官として日頃から新教徒に対して過酷な迫害を行っていたシェイラ神父（François de Langlade du Chayla/Chaila）が住んでいたのはル・ポン＝ドゥ＝モンヴェール（Le Pont-de-Montvert）であった。彼は1702年7月24日、不満が高じたカミザール（ユグノー）たちにこの地で襲撃されて殺された。この事件が引き金となって、カミザールの反乱が一気にセヴェンヌの地に広がっていった。この地域のカトリック教会の多くは、カミザール戦争の際に、プロテスタント勢力による略奪、破壊、放火によって、程度の差こそあれ何かしらの被害を受けている。国王ルイ14世はこの反乱の鎮圧に数年の歳月をかけなければならなかった。

セヴェンヌはまた、『宝島』（1883年）や『ジキル博士とハイド氏』（1886年）といった作品を著したスコットランドの作家ロバート・ルイス・スティーヴンソン（Robert Louis Stevenson, 1850-1894）が1878年、28歳の時に1頭のメスのロバとともに徒歩旅行を行ったことでも知られる。彼はオーヴェルニュのル・モナステイエ＝シュル＝ガゼーユ（Le Monastier-sur-Gazeille）からガール県のアレス（Alès）に向けて出発し、ちょうど同年9月の末から10月初め頃にセヴェンヌ山地にかかり、標高1000メートルを超えるような過酷な土地を、野宿などを続けながら短期間で踏破したのであった。彼はその旅の様子を『旅はロバをつれて』という旅行記として1879年に出版した。原題は、*Travels with a Donkey in the Cévennes* (1879) である（邦訳は『旅は驢馬をつれて』というタイトルで、吉田健一氏の訳と小沼丹氏の訳がある。またスティーヴンソンのこの旅については、拙論「ロバート・ルイス・スティーヴンソンの旅行記『旅はロバをつれて』と南仏ジェヴォーダン」『文明研究』第34号、2015年、東海大学文明学会、を参照のこと）。

この地域のロマネスク聖堂は、ロゼール県（ジェヴォーダン）の他の場所と同じく、概して小規模～中規模で、多少とも後の時代の改修・改築の手が加えられているものが多く、建築的には単身廊形式、南北に付けられた小さめの祭室、半円形（時に五角形）の後陣、身廊や後陣の上部に並ぶモディオン、ヴシュールを伴って南側（あるいは西側）に開くポルタイユ、などといった特徴が見られる。またその多くに共通するのは、後陣内部および外部に見られるアーケードに施された柱頭彫刻の様式、聖堂内部のとりわけ凱旋アーチやトランセプト交差部周辺に見られるアーチ・円柱の仕様、そしてそこに施された柱頭彫刻、身廊の側壁に見られる半円形の壁アーチなどである。

本稿で取り扱う聖堂は、前稿までと同じく「ロマネスク期」といっても厳密な時代の限定はせず、11～12世紀のいわゆる盛期の「ロマネスク」期を中心として、その前後の時代もゆるやかに含めたものである。聖堂全体がロマネスク期のものから、大なり小なり一部分がその時代のもの、建築様式がロマネスク様式をとどめているもの、そして現在では遺構となっているものなども含まれる。

聖堂の配列は、おおよそ行政地域区分に準じて整理することとし、ロゼールの県番号（48）、大まかな地域、そして自治体（Commune）の順で番号を付した。同一のコミューンに複数の聖堂がある場合は、「a. b. c. d.」というようにアルファベットで区分した。なおここで言う「大

まかな地域」は、以前の稿ではおおよそ行政区分の小郡《canton》ごとに整理していたが、カントンはしばしば再編されるため（直近では 2015 年）、その後カントンに沿ったグループ分けはやめ、文字通り地理的な「大まかな地域」ごとにまとめることとした。またコミューンさえも合併等の再編が行われることがある。例えば本稿で採り上げるル・ポン＝ドゥ＝モンヴェール（Le Pont-de-Montvert）とフレシネ＝ドゥ＝ロゼール（Fraissinet-de-Lozère）は、2016 年のコミューン再編に際して新しく ポン＝ドゥ＝モンヴェール＝シュドゥ＝モン＝ロゼール（Pont de Montvert-Sud Mont Lozère）に統合された。しかしそれでは分かりにくいいため、本稿では統合以前のコミューン区分に従って記述した。

聖堂は、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別的名称としては「教会」あるいは「礼拝堂」を用いた。個々の地名や聖堂の名称については、現地の慣用のものを採用した。

採りあげる聖堂は、基本的にすべて筆者が直接訪問・調査したものである。私有地であったりアクセス困難な場所にあるなどの理由で訪問出来なかった聖堂には▲を記した。写真画像は筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ（<http://nn-provence.com>）で閲覧可能である。

48. 8. フロラック（Florac）周辺からヴァレ＝フランセーズ（Vallée-Française）まで

48.8.1a. レ・ボンドン／サン＝サテュルナン教会（Église Saint-Saturnin, Les Bondons）

フロラックから県道 D998 と D135 で北へおよそ 11 キロ。サン＝サテュルナン教会はレ・ボンダンの集落の西の端に建っている。もとはマンド司教ギヨーム 3 世（Guillaume III de Peyre／在位 1123-1150 年）によってマンドの司教座聖堂参事会の管理下に置かれた小修道院付属聖堂であった。1123 年には教皇カリストゥス 2 世がこれを認可している。

聖堂の東側（後陣側）は村の墓地に囲まれている。聖堂西側には住宅（司祭館）が接続している。南側には、向かって左にモールドィングで縁取りされた尖頭形のポルタイユ（扉口）が開き、右には後の時代に増築された三角屋根の祭室と聖具室の 2 つが並んでいる。後陣は半円形で身廊部より高さが低い。聖堂北側には大きくて厳めしい方形（東西が長い長方形）の塔が建ち、塔の最上部の各面には鐘を吊すための半円形のベイがそれぞれ 2 つずつ並んでいる。塔の北・南・西面には、中段部にかつて開けられていた半円形のベイの痕跡が残されている。また塔の東面には大きくて高さのある扶壁（その中には上に登るための石段がある）が付けられている。

聖堂内部は、2 ベイからなる単身廊形式で、天井には半円筒形のトンネル・ヴォールトが架かる。ベイを区切る横断アーチは方形のピラストルが受ける。かつては身廊の側壁に半円形の大きな壁アーチが付けられていたが、それは今は西側のベイのみに残り、内陣に隣接する東側のベイの南北には、尖頭ヴォールトの祭室がトランセプトのように増築されている。その頂部

は身廊のヴォールトの起点となるコーニスよりも高い（北側の祭室の上は塔にあたる）。後陣は半円形で半ドームが載る。隅切りされた半円頭形の窓が左右に開けられている（中央にはない）。身廊の西端には木造の2階席が設けられている。Balmelle（1945）p.7；Trémolet de Villers（1998）p.409.



48.8.1a. Les Bondons

48.8.1b. レ・ボンドン／マルボスクのサン=プリヴァ教会

(Église Saint-Privat de Malbosc, Les Bondons)

フロラックからレ・ボンドンへ向かう途中、県道 D998 から D135 に入って約 2 キロのところで西に折れる。クルマの行き違いが難しいほどの細い小道をジューズ川に沿っておよそ 3 キロ登ると、小高い山の頂に家が肩を寄せ合うマルボスクの集落に行き着く。ここには 12 世紀、アンデューズ (Anduze) の領主が支配する城があった（現在は廃墟）。かつてはその城塞教会であったサン=プリヴァ教会は、この集落の中ほどのゆるやかな斜面に建っている。西ファサードには大きな丸窓（内部に向けて大きく隅切りされている）が開くのみで、その上には鐘を吊すベイが 2 つ並ぶ鐘楼が載る。一方聖堂の東側は民家が連続しているので後陣を外から見ることはできない。聖堂の北壁には開口部などは見られない。南側にはトランセプトのように切妻屋根の祭室が増築されている。修復の手が加えられたポルタイユはその聖堂南側にあって、二重の大きな半円アーチ（ヴシュール）の中に開いている。聖堂内部は半円筒形トンネル・ヴォールトが架かる 2 ベイからなる身廊に後陣が続くが、かつてその身廊のベイを区切っていた横断アーチは消滅していて、それを受けていた南北の壁付き円柱だけが残されている。その円柱には柱頭彫刻の類いは見られないものの、後陣（内陣）の一番奥の彩色された 2 本の小円柱には葉飾りと渦巻きの柱頭彫刻がある。ただし、この円柱はロマネスク期のものではない。聖堂内部は南側の祭室を含めて、近年の修復によって側壁は薄い黄色、茶色のコーニスの上に架かるヴォールト部分はそれよりも濃い黄色の漆喰で上塗りされている。塗料の剥落なども目立ち、さらなる修復作業が待たれるところである。

Trémolet de Villers（1998）pp.413-414.

48.8.2. ベドゥエス=コキュレス／サン=サテュルナン礼拝堂

(Chapelle Saint-Saturnin, Bédouès-Cocurès)

ベドゥエスは 2016 年に北に隣接するコキュレスと統合されて新しくベドゥエス=コキュレスというコミューンになった。フロラックから県道 D998 に折れて約 2 キロでベドゥエス地区に入り、さらに 400 メートルほど南に向かう。サン=サテュルナン礼拝堂は集落の一番奥（南）

にあり、その西側はこの集落の墓地となっている。もともとは 12 世紀に建設された教区教会であった。ここから直線距離にして西へおよそ 10 キロにあるグリザック (Grizac) の城で 1310 年 (または 1309 年) に生まれたギヨーム・ドゥ・グリモワール (Guillaume de Grimoard)、すなわち後のアヴィニヨンの教皇ウルバヌス 5 世 (Urbain V / 在位 1362-1370 年) はこの教会で洗礼を受けている。トゥールーズで殉教した司教である聖サテュルナン (サン=セルナン) に捧げられたこの聖堂は、16 世紀の宗教戦争や 18 世紀のカミザールの乱などでも大きな被害を受けずに存続したが、次第に荒廃が進んだ。19 世紀前半にカボ・ドゥ・ラ・ファール家 (Cabot de la Fare) の所有となり、この家の墓所礼拝堂として改造されるとともに、19 世紀半ばには堂内がイタリア風の豪華な壁画で装飾された。この一族は 16 世紀のヴェネチアの貴族家に発し、その後フランスに移って 18 世紀にはジェヴォーダン家のラ・ファールに土地を購入していたのであった。サン=サテュルナン礼拝堂の堂内には一族の墓碑が掲げられている。1989 年にはベドゥエスのコミュニオンがさらに礼拝堂の改修・修復作業を行い、内部が公開されて現在に至っている。

この聖堂は形式的にはロマネスク様式を維持してはいるものの、19 世紀の改造のために全体的には新しい建築であると言って良い。塔も 19 世紀のものである。聖堂南側の壁 (そして北東の角) には分厚くて末広りの扶壁が並んでいる。後陣は半円形であるが、漆喰で塗り固められており、古さは感じられない。西ファサードはその半分近くが民家のために隠されている。上部には小さめの丸窓が開き、その下のごく簡素で小さなポルタイユから中に入る。19 世紀の壁画で装飾された堂内は 3 ベイからなる単身廊形式で、天井にはほんのわずかに尖頭形となったトンネル・ヴォールトが架かる。ヴォールトは青色に塗られ、多くの星が描かれている。横断アーチはない (アーチは彩色された絵で描かれている)。南北の側壁には彩色装飾の施された壁アーチが並んでいる。上下幅のある非常に大きな凱旋アーチの西に、半ドームの載る後陣 (内陣) が続く。その南北には尖頭形で縦長の窓が付けられている。凱旋アーチには二人の天使に挟まれて、かつてここで洗礼を受けたとされる教皇ウルバヌス 5 世の紋章が描かれているのが見える。

ベドゥエスには、サン=サテュルナン礼拝堂の北西約 400 メートルにある小山の上に、やはり教皇ウルバヌス 5 世が建てさせたゴシック様式のコレジアル聖堂 (Collégiale Notre-Dame-de-l'Assomption de Bédouès) が建っている。建設は 1363~1365 年で、彼は自らの両親の墓をここに造らせた。宗教戦争の際に、マチュー・メルル (Mathieu Merle) 率いるプロテスタント部隊によって攻撃された (1581 年)。建物は荒らされ、コレジアルの参事会員たちが虐殺された。聖堂はほとんどなく再建され、さらに 19 世紀に大規模に改修された。濃い茶色の片岩による石積みで、まるで城塞のような厳めしい建物と尖頭の載る背の高い塔が印象的である。

Balmelle (1945) p.6 ; Buffière (1985) pp.324-325, pp.547-548, pp.775-777, pp.833-835 ; Chastel (1981) pp.6-7 ; Durliat et al. (1966) p.17 ; Trémolet de Villers (1998) pp.414-415 ; Verrot (1994) pp.52-56 ; Werth (2013) p.126 ; *RIP*.

48.8.3. ル・ポン=ドゥ=モンヴェール/フリュジェールの旧教区教会

(Ancienne église de Frutgères, Le Pont-de-Montvert) 遺構

フロラックから県道 D998 を 21 キロでル・ポン=ドゥ=モンヴェールに至る。ここは、18 世紀初めのいわゆるカミザール戦争（別名セヴェンヌ戦争）の際に、この地に住んでいたシェイラ神父（François de Langlade du Chayla/Chaila）が殺されたことで知られる。彼はセヴェンヌ地方の布教監督官でもあり、ラングドック地方総督バヴィルのもとで日頃からプロテスタントに対して過酷な迫害を行っていたために、1702 年 7 月 24 日、不満のたまっていたカミザール（プロテスタント）たちに襲撃されて殺された。この事件が発端となって、カミザールの反乱が本格化することとなった。このカミザール戦争については、プロテスタント側の当事者の一人であったジャン・カヴァリエの記録（『フランス・プロテスタントの反乱―カミザール戦争の記録』二宮フサ訳、岩波文庫、2012 年）が残されており、シェイラ神父殺害の事件の様子についても記述がある。

ル・ポン=ドゥ=モンヴェールには、カトリックの新しい教区教会と、プロテスタントの寺院（Temple protestant）がある。前者はラテン十字の平面プランで、村の北からリュマレ川沿いに下ってくると、向かって右側の斜面に建っており、尖頭形の鐘塔がすぐに目につく。一方、後者は、川の東側のル・ポン=ドゥ=モンヴェールの村の中ほどを少し登ったところにあり（クロズレ地区）、この村の墓地に隣接している。1878 年 9 月 22 日、スコットランドの作家ロバート・ルイス・スティーヴンソン（Robert Louis Stevenson, 1850-1894）が、28 歳の時に 1 頭のメスのロバとともに行った徒歩旅行でル・ポン=ドゥ=モンヴェールを訪れた際、彼はこの新教の寺院を最初に目にしている。この寺院は、ルイ 14 世がナントの勅令を廃止したあと破壊されたが、1801 年のコンコルダ（政教条約）ののち 1828 年に再建された。平面プランは単純な長方形の箱形で、西正面は大きな丸窓を介してその上に三角形の切妻と、さらにその上に四角い小さな鐘楼が載る。単身廊形式の内部は、木製のヴォールトが架かり、身廊の左右にはやはり木製のトリビューンが付けられている。20 世紀に入ってさらなる修復作業が行われていて、この聖堂には一見してロマネスク的な要素も見受けられるものの、実際には 19 世紀の新しいものである。

フリュジェールの集落は、ル・ポン=ドゥ=モンヴェールから県道 D998 をタルン川に沿って東へ約 3 キロ進んだところで北に折れ、さらに細い道を 300 メートルほど登る。農家が何軒か集まるだけのこの小さな集落の中ほど、D998 から来ると向かって右側の斜面に、12 世紀にまでさかのぼるとされるロマネスク様式の古い聖堂の遺構が残っている。その頃ル・ポン=ドゥ=モンヴェールはまだごく小さな閑村に過ぎなかったのに対して、ここフリュジェールがこの地域の中心的地位にあったようで、サン=ブリヴァ（聖ブリヴァトゥス）に捧げられたとも言われるこの聖堂が教区教会の役割を果たしていた。1166 年、サン=ジルを南仏における本拠地としていた聖ヨハネ騎士団（エルサレムの聖ヨハネ病院騎士修道会 Hospitaliers de Saint-Jean de Jérusalem。後のマルタ騎士団）が、ル・ポン=ドゥ=モンヴェールから北へおよそ 8 キロのところに拠点の 1 つを築いたことから、フリュジェールの教区教会もこの騎士団の管理下に置かれるようになった。この拠点は Gap Francès と言い、標高 1375 メートルに位置するその場所

は「ロピタル L'Hôpital」という地名で今日まで残っている。現在も何軒かの農家があるが、騎士団に関係するものはほとんど何も残っていない。フリュジェールの教区教会はその後、18世紀のカミザールの乱の際にプロテスタントの襲撃によって大きく破壊され、この司祭ルヴェルサ（Reversat）も殺された。それはル・ポン＝ドゥ＝モンヴェールでシェイラ神父が虐殺された翌日のことであったという。以後も聖堂はそのまま放置され、現在は半ば崩れた状態のまま農家の倉庫として使用されている。

もとは十字形の平面プランであったとされるが、現在残るのは身廊または後陣であったと思われる建物の一部とその壁のみである。切り整えられた端正な石積みが残るその壁の南側にはゴシック様式の縦長の窓が付けられ、その下にはおそらくさらにもっと後の時代に開けられた四角い大きな出入りが開けられている。集落の奥の小道からその建物の北側に回ると、かつてヴォールトの下に開いていたと思われる大きな尖頭アーチが見られ、そのすぐ隣に、内側に向けて大きく隅切りされたロマネスク様式の窓の遺構が残されているのが分かる。

Balmelle (1945) p.50; Hélas (1995) pp.143-156; Stevenson (1960) p.167.／邦訳 102 頁。
カヴァリエ (2012) 81-85 頁、428-429 頁、431 頁。GV; RIP.

48.8.4. フレシネ＝ドゥ＝ロゼール／サント＝マリー教会

(Église Sainte-Marie, Fraissinet-de-Lozère)

フレシネ＝ドゥ＝ロゼールはル・ポン＝ドゥ＝モンヴェールから D35 で西へ約 5 キロである。サント＝マリー教会はこの県道沿いの墓地の中に建っている。早くも 11 世紀の史料にこの地域の教区教会としてその名が登場する。最初はマルセイユのサン＝ヴィクトール修道院に属していたようであるが、17 世紀にはサン＝ジル修道院（現ガール県）が所有していた。16 世紀の宗教戦争や、とりわけ 18 世紀のカミザール戦争の際に大きな被害を受け、鐘楼も 1702 年に打ち壊されてしまった。その後修復工事が進められ、大きな扶壁が左右両端で放射状に付けられた西ファサードは 18 世紀に、またその上に立ち上がる上部が平らな方形の鐘楼（鐘を吊すベイが 2 つ並ぶ）が 1804 年に新たに建設された。鐘楼壁（clocher-mur）となったこの西ファサードには扁平アーチの架かる大きな扉があり、その中はゴシック様式のポーチ（数段の石段を下りる）となっていて、さらにその奥に開くのが身廊に入るための古いポルタイユである（2 重の半円形ヴォシュールはロマネスク期のものではない）。3 ベイからなる身廊は、やはり近代になってから幾多の修復・改修を経ていて、天井には横断アーチで区切られた半円筒形トンネル・ヴォールトが水平のコーニスの上に架かる。横断アーチは高さのある方形のピラストルが受ける。ただし身廊の西端で受けるのは円柱である。これらの柱には柱頭彫刻などの装飾的要素は見られない。身廊の南北両側の壁は、各ベイにおいて半円形の壁アーチが付けられ、さらにその中に、内部に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。ただし最も東のベイでは、17 世紀になって身廊の南北にそれぞれトランセプト様の祭室が増築されている。それらの祭室の天井は半円筒ヴォールトで、身廊側壁と同様に隅切りされた窓が開けられている。交差部とも言えるベイの東側には、およそ 1 メートルほどの短い内陣のベイ（祭壇が置かれている）と

半円形の後陣が続く。この後陣には小円柱のアーケードなどはなく、3つの開口部が見られだけである。中央にあるのは小さな長方形の窓で、これは最近まで埋められていたもの。そのすぐ両側には、やはり半円頭形で内陣に向けて大きく隅切りされた窓が開けられているが、この左右の窓が非常に縦長であるのが特徴的である。

このサント=マリー教会においては、後陣に架かる半ドームとそれに隣接する内陣のヴォールト部分、そして内陣と身廊の間にあ



48.8.4. Fraissinet-de-Lozère

る凱旋アーチ (arc triomphal) に、近代になってから描かれた壁画装飾が見られる。1990年代になって発見され、その後修復された。描かれたのは1670年頃とされ、モチーフは渦を巻く金色の唐草文様である。凱旋アーチの中央には、祭壇に置かれた大きな十字架が描かれている。一方、後陣の半ドームの中央上部に描かれているのは、周囲にまばゆい光を放つ丸い太陽である。その光の矢の間には小さな星が並べられている(星の一部は剥落)。またこの太陽の下には翼を拡げた鳩が描かれている。1702年、カミザール戦争の際にこれらの壁画もかなり毀損し、18世紀後半にその上から新たに描き直されたが、この鳩や、その他には花のブーケ、さらに横断アーチやコーニス部分の絵などはその時に描かれたものであるとされる。ちなみにそのカミザールの反乱の際、シェイラ神父とともにル・ポン=ドゥ=モンヴェールで虐殺された彼の従僕 Michel Ravajat が、このサント=マリー教会に葬られている。

ここからさらに西へ4キロほど行くと、「リュヌの滝」(Cascade de Rûnes)がある。約70メートルの高さから何段にも渡って水が落ちる美しい滝で、この地域の観光スポットとしても人気を呼んでいる。

Balmelle (1945) p.18; Buffière (1985) p.699; Trémolet de Villers (1998) p.410; Verrot (1994) pp.48-49; Werth (2013) pp.126-127.

48.8.5. サン=ジュリアン=ダルパオン/サン=ジュリアン教会

(Église Saint-Julien, Saint-Julien-d'Arpaon)

フロラックから国道 N106 を東へ約 8 キロで北へ入ってミマント川を渡る。そのまま県道 D20 を 200 メートルほど進んだところでさらに右に折れて、今は廃墟となった城塞の方へ約 300 メートルでサン=ジュリアン=ダルパオンの旧集落に至る。サン=ジュリアン教会は、向かって左手の斜面に、今は半ば荒廃した廃屋のような姿で残っているが、もともとの建設は 12 世紀にまでさかのぼるとされるものである。その時代、フロラックのパロニー(男爵領)は、アンデューズ(Anduze、今のガール県アレスの南西約 15 キロ)の領主の支配下にあった。彼らはサン=ジュリアン=ダルパオンの城塞も所有し、サン=ジュリアン教会はその城の城塞礼拝堂と

しての役目を果たしていた。その後 13 世紀後半になってマンド司教がこの地を手に入れることとなり、マンドの司教座聖堂参事会がこの聖堂を管理下に置いた。聖堂は 16 世紀の宗教戦争や、18 世紀のカミザール戦争、そしてフランス革命によって被害を受けた。19 世紀に再建・修復が進められ 20 世紀半ばまでは使用されていたが、その後はいったん個人所有となった後に放棄されてしまい、そのまま荒廃が進んで今日に至っている。

聖堂の平面プランはほぼラテン十字形で、中には南側に開けられた扉口から入る。2 ベイからなる身廊の南北にはそれぞれ祭室が付けられている。凱旋アーチは上下幅のある大きなもので、とりわけアーチの南側はピラストルとなって床まで降りる。その東側はロゼールでは珍しく方形の内陣となっており、東端の平面形の壁すなわち後陣の壁には、埋められてしまった大きな開口部（窓あるいは出入口か）の跡がある。内陣の南側には聖具室が増築されている。内陣と身廊西側のベイに架かっていた半円筒形ヴォールトは崩落している。身廊と南北の祭室のいわば交差部のみ、半円筒形のヴォールトが残る。聖堂の西ファサードには頂部が三角形で鐘を吊すベイが 1 つだけの小さな鐘楼が立つ（鐘はそのまま残っている）。西ファサードのそのすぐ下には小さな丸窓が開いている。身廊の南側の祭室には、18～19 世紀頃のものと思われる彩色されたフレスコ画が残されている。尖頭形のアーチが 3 つ、そしてその中央には植物で飾られた十字架と、その上に星がそれぞれ描かれている。北側の祭室には、朽ち果てた木製の告解室が放置されている。それを目にするだけでもこの聖堂全体の打ち捨てられた荒廃ぶりがひしひしと伝わってきて、なんとも言えないもの悲しさを感じさせる。

Balmelle (1945) p.67 ; Trémolet de Villers (1998) p.420 ; *FSAF*.

48.8.6. サン=ブリヴァ=ドゥ=ヴァロング/ノートル=ダム=ドゥ=ラ=サレット教会

(Église Notre-Dame-de-la-Salette, Saint-Privat-de-Vallongue)

フロラックから国道 N106 で東へ 28 キロ（ガール県との県境までは 18 キロ）、県道 D29 との分岐の 500 メートルほど手前で細い道を北へ向けて登る。サン=ブリヴァ=ドゥ=ヴァロングの集落を過ぎてさらに登るとヴァカンス休暇村（village de vacances）となるが、ノートル=ダム=ドゥ=ラ=サレット教会はそのヴァカンス施設の敷地内に建っている。

聖堂の建設は 12 世紀にさかのぼり、今のガール県アレスのすぐ北にあったサンドラス修道院（abbaye de Cendras）に属するベネディクト派の小修道院聖堂であった。セヴェンヌの他の聖堂と同じように、18 世紀初めのカミザール戦争の際に大きく被害を受け、その後再建された。破壊された修道士の建物は司祭館となっている。東側から見ると、平たい形状の片岩を積み重ねた半円形の大小の後陣が 2 つ並んでいる。いずれも南東側に小さな開口部が付くだけのシンプルなものである。北側の大きな後陣に対応する大きな身廊が先に作られ、南側の小後陣に対応する小さな身廊はその南側に後から増築されたもので、2 つの大小の身廊が並ぶ構造になっている。この南側の身廊の外部には、やはり片岩を美しく組み並べて作られた大きな壁アーチが付き、その内側には、上部に方形の窓が開き、その斜め下には半円頭アーチのかつての出入口の痕跡が残る（今は埋められている）。一方、聖堂の北側には 3 つの大きな扶壁が付く

が、そのうち東側の 2 つはフライング・バットレス（飛び梁）となっている。小身廊と司祭館の間に、南北方向を向いた小さな鐘楼が立っている。聖堂内部には西ファサードに開けられたポルタイユ（半円形のコーニスに縁取られた二重のアーキヴォルトが架かる）から入る。内部は全体が白く上塗りされている。大きな主身廊の天井は半円筒形トンネル・ヴォールトで、ペイを区切っていた横断アーチは失われている。半円形の後陣には半ドームが載る。主身廊と並ぶ小身廊の方は《chapelle》と呼ばれ、天井は木造ヴォールトである。主身廊とは、いびつな形の尖頭アーチのアーケード（実は大きな半円アーチの中央に方形の柱を立てたもの）を介して接続している。



48.8.6. Saint-Privat-de-Vallongue

昔この聖堂の周囲にあった古い集落は今は消滅しており、かろうじて残る墓地も打ち捨てられたままとっている。すぐ隣にはヴァカンス施設の大きなプールなどが作られていて、かつての歴史的な雰囲気が失われてしまっているのは残念なことである。

Balmelle (1945) p.72 ; Chastel (1981) pp.29-30 ; Trémolet de Villers (1998) pp.421-422 ;

48.8.7. サン=フレザル=ドウ=ヴァンタロン／プロテスタント寺院

(Temple protestant, Saint-Frézal-de-Ventalon)

フロラックから国道 N106 で東へ 29 キロ、ガール県との県境から西へ 17 キロのところで県道 D29 を北に向かって約 5 キロ。県道から向かって左（西）に 30 メートルほど入ったところに、かつてのカトリックのサン=フレザル教会が建っている。18 世紀初めのカミザール戦争の際に、セヴェンヌ地方の他の多くの聖堂同様に大きな被害を受け、その後再建された。現在はプロテスタントの寺院となっており、礼拝のほか、コンサートや展覧会など地元のさまざまなイベントにも活用されている。聖堂南側にはポーチの内側に架かる大きな半円アーチの中に小さな出入口が付けられているが、現在は丸窓のある東側の壁（より正確には北東を向いているファサード。かつてはこちら側が後陣であったと思われる）に開けられた半円頭形の扉から中に入る。内部はきれいに白く上塗りされていて、歴史的な古さはまったく感じられない。半円筒形トンネル・ヴォールトが架かる単身廊形式で、かつては祭室であったと思われる半円筒形ヴォールトの架かる空間が身廊部の両側にある。後陣は平面形であり、集会室や地元の民宿などの建物が聖堂西側に直接続いているので、後陣を外から見ることはいくつかできない。

Trémolet de Villers (1998) p.429.

48.8.8. サン=タンデオル=ドウ=クレルグモール/サン=タンデオル教会

(Église Saint-Andéol, Saint-Andéol-de-Clerguemort)

サン=フレザル=ドウ=ヴァンタロンからさらに県道 D29 を北に 5 キロほど進むと県道 D35 に当たる。それをおよそ 3.5 キロ東へ向かい、ガール県との県境の手前 3 キロのところで南に下る細い道に入り約 1.5 キロ。民宿など数件があるだけの山間のひっそりとした場所（文字通り《hameau de l'Église》と呼ばれる）に、サン=タンデオル教会が建っている。「クレルグモール」という地名は、10 世紀頃に異民族の侵入によってこの地の聖職者が殺された古い記憶、すなわち「僧侶の死」（Clerc mort）を連想させるものであるとも言われるが、確かなことではない。この地にあった小修道院は歴史が古いもので、教皇カリストゥス 2 世の 1123 年の証書にその名が見え（parrochia Sancti Andeoli）、マンドの司教座聖堂参事会の管理下にあった。18 世紀初めのカミザール戦争の際にプロテスタントの攻撃によって被害を受け、その後ロマネスク様式をとどめたまま再建された。

聖堂はもともとは 13 世紀の建設である。2 ベイからなる単身廊と半円形の後陣というシンプルな構造で、地形的な事情からか後陣は東ではなく、北東を向いている。身廊部の大きさと比べて不釣り合いなほど高さのある鐘楼（鐘を吊すベイは 1 つだけ）が、西ファサードの上に立っている。東壁は大きなニッチの半円形壁アーチとなっていて、その中にさらに小さなニッチが付けられ、そこに聖母像が置かれている。その東壁からさらに壁のような分厚いアーケードが南側に続くが、これは聖堂のかつての側壁の遺構というわけではない。聖堂内部は 1993 年に行われた修復工事によってきれいに整えられている。2 つのベイの天井は交差ヴォールトであるが、これはオリジナルのものではない。身廊の南北の壁は各ベイに半円頭形の壁アーチが付けられ、南側ではその中に半円頭形の窓が開けられている。ポルタイユも南壁の窓のすぐ下に付けられている。半円形の後陣には東と南に内部に向けて隅切りされた小さな開口部があり、北には聖具室への扉がある。身廊のヴォールトの起拱点より高い位置に付けられた水平のコーニスの上には半ドームが架かる。堂内には彫刻装飾の類いはまったく見られない。

Buffière (1985) p.701 ; Trémolet de Villers (1998) p.429 ; *RIP*.



48.8.8. Saint-Andéol

48.8.9. サン=ジュリアン=デ=ポワン/サン=ジュリアン=ドウ=ラ=コンブ教会

(Église Saint-Julien de la Combe, Saint-Julien-des-Points)

フロラックから国道 N106 で 46 キロ、ガール県との県境のアンドルジュ川（ガルドン川の支流）に架かる橋のすぐ手前（西側）から《Saint-Julien-des-Points》と《Église》の標識に従って細い道を北へ向かう。何度も急なカーブを曲がりながら登ること約 3 キロで《La Combe》

に至る。

サン=ジュリアン=ドゥ=ラ=コンプの小修道院 (prieuré) は、1155 年にはマルセイユのサン=ヴィクトール修道院に属していたことが確認される。その後 15 世紀になると、モンペリエのコレージュであるサン=ブノワ=エ=サン=ジェルマン学寮の管理下に入るが、このコレージュがサン=ピエール大聖堂に吸収されると、サン=ジュリアン=ドゥ=ラ=コンプ小修道院もこの大聖堂 (司教座聖堂) 参事会のもとに移された。聖堂は 16 世紀の宗教戦争や 18 世紀初めのカミザール戦争によって被害を受け、その後改築・再建された。周囲 (西側を除く) を墓地に囲まれている。外壁は漆喰で塗り固められていて、あまり古さを感じさせない。西ファサードには半円頭形のシンプルなポルタイユが開き、その上には小さな鐘楼が載る。後陣は半円形である。後陣の北側には聖具室が、また身廊の南北にそれぞれ祭室が増築されている。この身廊の天井は半円筒形トンネル・ヴォールトで、後陣の上には半ドームが載っている。後陣にはその南側に、外側に向けて大きく隅切りされた開口部が 1 カ所あるが、大きさは小さいので採光の役割はあまり果たしていない。

Balmelle (1945) p.67 ; Trémolet de Villers (1998) pp.428-429.

48.8.10. サン=ティレール=ドゥ=ラヴィノール・キャップのプロテスタント寺院

(Temple protestant du Cap, Saint-Hilaire-de-Lavit)

フロラックから国道 N106 を東へ約 33 キロのところで、《Saint-Hilaire-de-Lavit》への標識にしたがって村道 C1 を南に入り 3 キロほど行くと、わずかばかりの民家が集まるル・キャップ (Le Cap) と呼ばれる地区に至る。セヴェンヌの山々の豊かな緑に囲まれた静かな場所である。聖イレール (6 世紀のマンド司教) に捧げられたこの聖堂は、もとはマンドの司教座聖堂参事会に属する小修道院のものであった。18 世紀初めのカミザールの反乱によって被害を受けた後、再建されてプロテスタントの寺院となった。現在は民宿の建物の陰に隠れるようにして建っていて、西側はさびれた墓地である。聖堂全体がセメントで上塗りされているので、外観はあまり古さは感じられないが、それでもロマネスク様式の面影が残っているのは、西ファサードのポルタイユと後陣部分である。方形の西ファサードには上部に大きな丸窓 (oculus) が開けられ、その下の半円頭形のポルタイユには二重の半円形ヴァシュールが架かる。身廊北側に増築されている祭室には、ロマネスク様式の半円頭形の窓が見られる (窓だけ再利用したのであろうか)。後陣は半円形の大きなもので、その東側と北側に、小さくて細長い開口部が付けられている (これは内部に向けて隅切りされている)。この後陣の外観は、サン=プリヴァ=ドゥ=ヴァロン [48.8.6.] のそれと類似しているとも言われる。内部は 2 ベイからなる身廊の東に、内陣のベイと半円形の後陣が続く。左右に祭室の付けられた身廊東側のベイには交差リブ・ヴォールトが架かる。後陣には半ドームが載る。いかにもプロテスタントの寺院らしく、装飾の類いはまったく見られない。堂内全体が漆喰で白く上塗りされているが、あまり使用されている様子もなく、放置され荒れた感じがする (2013 年現在)。

サン=ティレール=ドゥ=ラヴィには、このル・キャップ地区から 600 メートルほど北のレル

ズ (L'Elze) と呼ばれる場所に、やはり地元の民宿に隣接してカトリックのレルズ教会 (Église de l'Elze) が建っている。ラテン十字形の平面プランでロマネスク風の半円形後陣がついているが、実際には近代になってからの建築で、身廊や祭室そして後陣部に付けられた窓などは、尖頭形のゴシック様式である。内部の天井は交差ヴォールトとなっている。

Balmelle (1945) p.65 ; Buffière (1985) p.1477 ; Trémolet de Villers (1998) pp.423-424 ; *RIP*.

48.8.11. ヴェブロン／サン＝ピエール旧教会 (Ancienne église Saint-Pierre, Vébron)

フロラックから県道 D907 を南へおよそ 13.5 キロ南。県道沿いにある村役場 (mairie) の横から村の広場に入り、さらに墓地の横の道を 30 メートルほど西へ行くとサン＝ピエール旧教会が建っている。高い尖塔が目印になるので容易に見つけることができる。聖堂の南側は墓地になっている。12 世紀、この地にはサン＝テニミー修道院に属する小修道院があった。代々のヴェブロンの小修道院長はサン＝テニミー修道院長から任命されていたが、14 世紀後半にアヴィニヨンの教皇ウルバヌス 5 世 (ウルバン 5 世) が、一時的にイスパニヤックのサン＝ピエール修道院に移管した後、次の教皇グレゴリウス 11 世が今度はサン＝シャフル＝デュ＝モナステイエ修道院 (サン＝テニミー修道院の母院。現在のオーヴェルニュ地方オート＝ロワール県) に付属せしめた。16 世紀の宗教戦争の際にプロテスタントによって略奪・破壊された。

聖堂の大部分はその後再建されたものだが、内陣部分がロマネスク期の面影を今によく伝えている。西ファサード (正確にはファサードは南西を、後陣は北東を向いている) も近代になって改築されたもので、そこに開けられたポルタイユは尖頭形のゴシック様式である。三重の円筒形ヴァシュールが 3 本の小円柱の上に載っている。一番外側は方形のモールディングである。内部は 2 ベイからなる单身廊形式で、天井は交差ヴォールトである。東側のベイの左右にトランセプト様の祭室が付けられている。それらの祭室の天井も交差ヴォールトである。身廊の東 (北東) には、内陣のベイをへて東端には祭壇の置かれた半円形の後陣が続く。聖堂内部は 2017 年に大々的な修復工事が行われ、祭室のアーチや横断アーチの弧帯部、ピラストルなどの石組み以外は、漆喰で白く上塗りされて整えられた。後陣は、半ドームがその上に架かる水平のコーニスを境にして、下が赤色、上が青色の、かつての彩色の痕跡がそのまま残されている。後陣には左右に開口部が付けられている。2017 年には聖堂外部においても、屋根の葺き替えや外壁の補修などの手が加えられた。身廊の側壁などはさまざまな大きさの片岩が積まれ、それを大きな扶壁が支えている。南北の祭室に付けられた窓は半円頭形のロマネスク様式である。身廊部よりも高さも幅も小さな後陣は、外部がセメントで塗り固められてしまっている。後陣の北側には高さのある方形の鐘塔が立ち上る。2 本のモールディングによって 3 段構えになっていて、最上段にはゴシック様式で縦長のベイが 2 つ一組となって開けられている。頂上部は尖塔となっている。なおこの聖堂は、現在はヴェブロンのコミュニンの所有となっており、コンサートや展覧会などのイベントに使用されている。またヴェブロンには村役場の 50 メートル北の県道沿いに、19 世紀に建てられたプロテスタントの寺院もある。

Balmelle (1945) p.75 ; Buffière (1985) pp.321-322 ; Trémolet de Villers (1998) pp.378-379.

48.8.12. フレシネ=ドウ=フルク/サン=ジェルヴェ=エ=サン=プロテ教会

(Église Saint-Gervais-et-Saint-Protais, Fraissinet-de-Fourques)

フロラックからは県道 D907 と D996 を南へ約 18.5 キロ、ヴェブロンからは 5 キロである。セヴェンヌ断崖 (Corniche des Cévennes) の西端にあたり、ここから西はメジャン台地 (Causse Méjean) となる。12 世紀にはアンデューズの領主が支配するバロニー (男爵領) であった。聖堂は県道 D996 が村の中心で大きくカーヴするところから 50 メートルほど南に入ったところに、墓地に囲まれて建っている。

2 世紀に殉教したミラノの守護聖人である聖ジェルヴェ (聖ジェルヴァシウス) と聖プロテ (聖プロタシウス) に捧げられており、典型的なセヴェンヌのロマネスク聖堂であると言われている。もとはこの地にあったおそらくはベネディクト派の小修道院の付属聖堂で、15 世紀にはマンドの司教座聖堂参事会の管理下に置かれていた。この村は 16 世紀の宗教戦争に際してはプロテスタント勢力が優勢なセヴェンヌのただ中であってカトリックの牙城であり続けたため、周辺の村々から執拗に攻撃を受け続けることとなった。聖堂は何度も荒らされ、17 世紀前半 (とりわけ 1622~1628 年) には大きな被害を受けた。その後、1685 年のナントの勅令廃止後に拡張工事が行われ (1686~1689 年)、南北の側室 (祭室) などが増築された。村は 18 世紀初めのカミザール戦争に際してもやはりプロテスタント側からの攻撃を受けるが、特に 1703 年 2 月 21 日の略奪と破壊は悲惨を極めた。アンリ・カスタネ (Henri Castanet) の率いるおよそ 1200 名のプロテスタント (カミザールたち) が村を襲い、女や子ども、老人などを含めて 39 名もの住民を虐殺したと伝えられる。48 軒の家が焼かれ、サン=ジェルヴェ=エ=サン=プロテ教会も破壊された。Felix Buffière などはこの出来事を「1703 年のオラドゥール事件」と呼んでいる (オラドゥール=シュル=グラヌはフランス中西部のオート=ヴィエンヌ県にある村。第二次世界大戦中の 1944 年 6 月 10 日、ナチス武装親衛隊がドイツ占領下にあったこの村を襲い、ほぼ全住民にあたるおよそ 640 名を虐殺した)。フレシネ=ドウ=フルクではその後、聖堂の再建が 1710 年から 1712 年にかけて行われた。フランス革命に際して聖堂自体が一時的に閉鎖されるなどしたが、19 世紀以降は、修復・整備が進められて今日に至っている。

サン=ジェルヴェ=エ=サン=プロテ教会の建設は 12 世紀後半とされる。身廊部の南北の外壁に、ロンバルディア帯の装飾が残っており、これをロマネスク初期に特徴的なものとするなら、聖堂の建設は 12 世紀前半くらいにさかのぼる可能性がある。このロンバルディア帯は、身廊部北側の壁では東から 2 番目と 3 番目のベイに、それぞれ半円形の小アーチが 3 つ一組となって並ぶアーケードとなっている。最も東のベイのものは失われているが、身廊部南側の壁では、3 つのベイすべてに残っている。ただし北側のそれとは異なり、それぞれのベイに小アーチが 2 つで一組のアーケードとなっている。ベイの大きさは同じなので、アーケードを構成する小アーチの大きさは、当然南壁のものの方が大きい。また南北ともに、小アーチにはモデ

イオン彫刻が付いているけれども、南壁のそれの方が、より摩耗が少ない（形がきれいに残っている）。したがって、南壁およびそこに付けられたロンバルディア帯の方が、北壁のものよりも新しいと考えられるのである。また南北ともに 17 世紀に増築された側室（祭室）によって、ロンバルディア帯の小アーチのモディオンから下の部分が隠されてしまっている。後陣外部は五角形である。中央に開口部はなく、南北側に半円頭形の窓が開けられている。漆喰の上塗りが剥落し、その下の石積み



48.8.12. Fraissinet-de-Fourques

露出している。西ファサードには、かつては鐘楼壁が立ち上がっていたと思われるが、現在は大きくて背の低い鐘塔という形に変わっている。この鐘塔の上は、一番上に時計を置いた尖塔である。また鐘塔の一番下は交差ヴォールトの架かる狭いポーチとなっている。そこにはこの西ファサードに開けられていたもとのポルタイユ（扉口）があるが、今は埋められてしまっている。聖堂の現在のポルタイユは南壁（身廊の西端のベイの南側）にあって、木製の屋根が付けられている。この屋根とその上のロンバルディア帯の間には丸窓が開いている。

聖堂内部は单身廊形式で、半円形の横断アーチとそれを受けるピラストルによって 3 つのベイに区切られている。天井は水平のコーニスの上に半円筒形トンネル・ヴォールトが架かる。身廊の両側には、北側に 2 つ、南側に 3 つの祭室が並ぶ。それぞれ半円頭形のアーチによって身廊に対して開いている。最も西のベイに付けられた半円形の壁アーチが（ポルタイユの上のものも含めて）最も古いものである。身廊の東には内陣が続き、凱旋アーチを介して半円形の後陣に続く。後陣の半ドームは、身廊のヴォールトよりも低い位置に架かる。一方、聖堂の西壁には、鐘塔が建てられたために今は埋められてしまった古いポルタイユの痕跡が残されている。その上には、やはりロマネスク様式の開口部の跡が見られるが、これもまた埋められている。聖堂内には装飾彫刻や壁画の類いはまったく見られない。後陣の半ドームには、かつて描かれていた「栄光のキリスト」のフレスコ画の痕跡が残されていたと言われるが、残念なことに 1970 年代の改修工事の際に失われてしまったようである。

Balmelle (1945) p.18; Buffière (1985) p.687, pp.1107-1109; Trémolet de Villers (1998) pp.376-377; *RIP*.

48.8.13. ガテュジェール／聖母被昇天教会

(Église Notre-Dame de l'Assomption, Gatuzières)

フレシネ＝ドゥ＝フルクから県道 D996 をさらに南へ約 9 キロ。村の北側を西に向けて通り過ぎて 1 キロほど進んだところで D996 を左（南）に折れて東方向に戻る。聖母被昇天教会は、集落の南の少し低い場所に、西ファサードの向かって右側が、隣接する司祭館に隠されるよう

にして建っている。司祭館のさらに西側は墓地となっている。12 世紀、ここにはジェローヌ修道院 (Abbaye de Gellone、今のエロー県サン＝ギレーム＝ル＝デゼール) に属する小修道院があった。1274 年には、ここからおよそ 20 キロ南にあったノートル＝ダム＝デュ＝ボンヌール修道院 (Abbaye de Notre-Dame-du-Bonheur/Bonahuc、現在のコミューンは Val-d'Aigoual で、修道院の廃墟のみが残る) の管理下に移された。17 世紀に入って宗教戦争による被害を受けるが、1635 年に修復された。しかし 1703 年に、今度はカミザールの乱 (セヴェンヌ戦争) によって再び破壊された。フランス革命の後は再建され 1939 年までは司祭も在所したがその後は不在となり、現在はメリュエイス (Meyrueis) の教区に組み入れられている。

聖堂の建設は 12 世紀にさかのぼる。19 世紀に行われた修復・再建工事によって全体的にはあまり古さを感じさせるものではない。身廊の東側部分と内陣および後陣が 12 世紀ロマネスク期のものである。ただし、外部も内部も漆喰で上塗りされているので、そうとは見分けがつかない。19 世紀の西ファサードには、三角屋根の上に鐘がひとつだけの方形の小さな鐘楼が立つ。大きな丸窓の下に方形のポルタイユが開いている。側壁には細い扶壁が付けられ、やはり 19 世紀 (1843 年) に身廊の南北にトランセプト様の祭室が増築されている。後陣は半円形で、外からは開口部は見当たらない。西ファサード同様に、聖具室の建物によって後陣の半分が隠されている。内部は漆喰で上塗りされ、きれいに整えられている。単身廊形式で半円筒形のトンネル・ヴォールトが架かる。身廊にはピラストルも横断アーチもないので、単一ベイのように見える。内陣の手前の南北に、半円筒形ヴォールトの架かる祭室があり、それぞれに尖頭形の窓が開けられている。内陣は身廊部から一段高くなっていて、その左右には基壇の上に立つ壁付きの小円柱が残されている (この小円柱はインポストの上には横断アーチなどは何も受けていない)。後陣は半円形で、青地に小さな星がちりばめられた彩色された半ドームが載る。聖具室が隣接するために外側からは分らないが、後陣の南側に窓が開けられている。後陣には 19 世紀の木製の祭壇がある。また堂内の内陣に近い信者席のところには、オリーブをプレスしてオイルを作るための古い平石版と、十字架が彫刻された「円盤形墓石」(stèle discoidale) が置かれている。この墓石の由来については不明である。堂内に彫刻装飾の類いはまったく見られない。

RIP.

48.8.14a. バール＝デ＝セヴェンヌ／ノートル＝ダム教会

(Église Notre-Dame, Barres-des-Cévennes)

フロラックから県道 D907 を南に 5.5 キロで県道 983 に入り、そこからおよそ 9 キロでバール＝デ＝セヴェンヌに至る。村 (あるいは小さな街と言ってもよいかも知れない) は、県道沿いに家々が細長く並ぶ。その西端のプロテスタント寺院の手前で左 (北) に入る細い道を 200 メートルほど進むと、突き当たりにノートル＝ダム教会が村の家々を見下ろすようにして建っている。バールは古くは 11 世紀からアンデューズの領主の支配下であって、村のすぐ北の岩山には強固な城塞 (Castelas) が築かれていたが、早くも 13 世紀には放棄されて廃墟化し、現

在はほとんど何も残っていない。14 世紀初め、バールの領主（バール一族）はフロラックの領主とともにフランス国王フィリップ 4 世（ル・ベル）とマンド司教ギヨーム・デュラン（6 世または 2 世）の間で 1307 年に取り交わされた「協約」（パレアーージュ）承認を拒んでいるが、ほどなく司教に従っている。バールの支配者は 15 世紀以降は、Taulignan、Thézan、Assas、Blégiers、Picard de Selletot といった一族に次々に引き継がれて 1789 年のフランス革命を迎えた。

12 世紀、この地にはベネディクト派のサン＝ピエール小修道院があり、マルセイユのサン＝ヴィクトール修道院に属していた。現在のノートル＝ダム教会はもとはその小修道院附属聖堂であった。その後、マンド司教の管理下に置かれ、教区教会となった。16 世紀の宗教戦争や 18 世紀のカミザールの反乱の際には、幸いなことに大きな被害を受けることはなかったが、17 世紀から 19 世紀にかけて、傷みが進んでいた屋根や側壁、床、窓、ステンドグラスなどに繰り返し修理の手が加えられた。19 世紀後半には身廊の西に新たに鐘塔が増築された。20 世紀に入って、後陣の東にあった小さな墓地が村の外に移されている。

聖堂の建設は 12 世紀とされる。主に身廊と後陣のもとの古いロマネスク期の部分に、ゴシック期から 19 世紀までさまざまな増築が行われてきた。12 世紀の部分は 3 ベイからなる身廊と内陣・後陣である。身廊の天井は半円筒形トンネル・ヴォールトで、各ベイの間には半円形の横断アーチが架かる。横断アーチはかつてはすべて方形のピラスト（壁付柱）が受けていたのであるが、現在そのピラストがはっきり残っているのは身廊南側の壁の西から 2 番目と 3 番目のベイの間にあるものだけで、残りはすべてゴシック期以降に増築・改築された壁面の中に取り込まれてしまっている。身廊の西から 3 番目のベイのさらに東には身廊部よりも南北幅が狭く東西幅も短い内陣のベイがあり、引き続いてさらに高さも幅も狭められた半円形の後陣が続く。後陣の最東面には内部に向けて大きく隅切りされた半円頭形のロマネスク様式の美しい窓が開けられており、ステンドグラスがはめられている。後陣の南北両側には内部および外部に向けてさらに大きく隅切りされたゴシック様式の尖頭形の窓が開いている。その窓はランブラージュ（トレーサリー）とランセットで装飾されており、やはりステンドグラスがはめられている。後陣の 3 つの窓のすぐ上には水平のコーニスが付けられ、その上に半ドームが載る。この後陣は外部においては、切り整えられた石が美しく積まれていて、持ち送りには無装飾のモディオンが等間隔に並んでいる。

ゴシック期以降に増築されたのは、内陣に隣接する身廊第一ベイの北に付けられた祭室と、南に並ぶ 3 つの祭室、そして身廊西端に付けられたトリビューンとその上の鐘塔である。まず身廊の北に付けられた祭室であるが、天井は 4 分交差リブ・ヴォールトで、リブは身廊との間の尖頭アーチとともに、小円柱形のキュ・ドゥ・ランプ（culs-de-lampe）が受け止める。北壁の上部には、ステンドグラスがはめられたゴシック様式で尖頭形の窓（ランブラージュとランセットで装飾）が開けられている。祭室の西側には聖具室へと続く扉が付いている。全部で 4 つある祭室の中で、身廊北側のこの祭室が最も古く、14 世紀から 15 世紀にかけてのものであるとされている。身廊南側の 3 つの祭室は、すべて尖頭形のアーチが架かるアーケードを介して身廊側に開いている。3 つ並んでいるために、あたかも主身廊に対する側廊のような印象を

受ける。増築されたのは 15 世紀から 16 世紀にかけての頃とされている。最も東側のものは、天井がリブのない交差ヴォールトで、残りの 2 つの祭室が交差リブ・ヴォールトとなっているのとは異なる。中央の祭室の身廊側に開くアーチの起拱点（アーチを受ける側柱の上部）には撚りひも文様の装飾が彫刻されている。一番西の祭室のそれには、ゴシック様式の星形（あるいは花卉形）装飾やフランボワイヤン文様が彫刻されている。また中央と西側の祭室のリブの起点には人間の顔が彫刻され



48.8.14a. Barres-des-Cévennes

たキュ・ドゥ・ランプが見られる。身廊南側のこれら 3 つの祭室には、すべて内部に向けて隔切りされランブラージュとランセット装飾が施されたゴシック様式の窓が開いている。これらの窓は、外壁にあっては尖頭形のモールディングで上部を縁取りされているが、中央の窓のみ、そのすぐ下の外壁に 2 つ連なる半円形のモールディングが残されている。

ロマネスク期の身廊部を西側へと拡張したのが、トリビューンとその下のポーチである。聖堂への出入口であるポルタイユは、このポーチの南側に付いている（下の地面から石段を 8 段上る）。半円形のアーチが付けられた飾り気のない扉口で、タンパンなどもない（ガラスがはめ込まれているだけ）。このポルタイユの上にも身廊南側の祭室に開けられた窓と同じ意匠のゴシック様式の窓がある。この窓は上階のトリビューンの南壁に開けられたものである。トリビューンは身廊西端の上階部分で、身廊から西に向かって右手側の石の階段で上っている。尖頭形の大きくて優美なゴシック様式のアーチを介して身廊側に開いている。そのアーチは、撚りひも文様がインポストに彫刻された短い側柱が左右両側で受ける。天井にはエレガントな 4 分交差リブ・ヴォールトが架かっている。このようなトリビューンが聖堂内部に、しかもロマネスク期の建物に増築する形で作られている例は、ロゼール（ジェヴォーダン）では極めて珍しい。西ファサードはトリビューンの西壁にあたるが、扶壁のように外に張り出た壁が中央に付けられていて、そこには一番下にニッチの半円形アーチ、さらにその上に尖頭形で縦長のやはりニッチのアーチが続き、一番上には 19 世紀終わり頃の鐘楼が立つ。聖堂東端のロマネスク様式の後陣と、西ファサードの近代的な意匠とが、はっきりとコントラストをなしていると言えよう。より味わい深い姿を見せているのは、聖堂の後陣側からの姿であることは言うまでもない。

Balmelle (1945) p.6 ; Buffière (1985) pp.270-271 ; Chastel (1981) pp.5-6 ; Darnas et Durand (2006) pp.116-131 ; Durliat, et al. (1966) p.15 ; Travier (1999) p.27 ; Trémolet de Villers (1998) pp.380-382 ; Verrot (1994) pp.20-22 ; *BM*; *GV*.

48.8.14b. パール=デ=セヴェンヌノラ・キュールのノートル=ダム=ドゥ=バルム礼拝堂

(Barres-des-Cévennes, Chapelle Notre-Dame-de-Balmes de La Cure)

パール=デ=セヴェンヌの村から県道 D20 で北へ 3 キロのところで《La Cure／Les Balmes》の小さな標識に従って左（東）へ折れる。およそ 500 メートルで森の樹木が途切れ、なだらかに傾斜する広々としたラ・キュールの牧草地に出る。ノートル=ダム=ドゥ=バルム礼拝堂は、その牧草地のただ中に建っている。隣接する民宿の建物以外には周囲に人工の建物がほとんどないことも相まって、自然に抱かれた小さなロマネスク聖堂の孤高な姿は実に味わい深く、魅力的で美しい。この礼拝堂は、もとは 12 世紀にこの場所にあった小修道院の付属聖堂であった。フランス国王フィリップ 4 世（ル・ベル）とマンド司教ギヨーム・デュラン（6 世または 2 世）が 1307 年の「協約」（パレアージュ）を取り交わす際に、その交渉のプロセスにおいて重要な役割を果たしたと言われる Jean de la Fabrière は、ここラ・キュールの司祭であった。この小修道院は、14 世紀のうちに在俗修道院となり、付属聖堂も教区教会となって 18 世紀まで存続した。カミザール戦争の際には大きな被害を受けている。その後、隣接する農家が買い取ったものの、19 世紀になってヴォールトや西ファサードの壁など建物の一部が崩れて荒廃が進んだ。しかし 1990 年代に大々的な修復工事が行われたことによって、かつての姿を取り戻している。

聖堂は側廊や側室などは何も付かないシンプルな単身廊形式で、全長はおよそ 19 メートルである。西ファサードは屋根が三角形の切妻形で、上部に隅切りされた半円頭形の小さなロマネスク様式の窓が付けられているだけである。この窓を含めて、西ファサードの壁面の向かって右半分は、1990 年代の修復工事によって再建されたものである。外壁には聖堂内部の各ベイに対応する形で力強い扶壁が並び、その間隔は西ファサードの左右両側に付けられたものから後陣に向けて、順に狭くなっている（つまり内部のベイの大きさが西から東へと順に狭くなっている）。後陣はシンプルな半円形で東と南に縦長の細い窓が開けられている（北側にはない）。窓は東端（内陣）のベイの南側にも開けられているが、これもまた 1990 年代の工事によって再建されたものである。南壁の西端のベイに、扶壁を兼ねた大きなポーチが付き、ポルタイユがその中に開けられている。扉口自体は方形で、半円形のアーチがその上に架かる。タンパンはない。聖堂内部は、幅 5 メートルの身廊が内陣のそれを含めて 3 つのベイからなり、東端は半ドームが載る半円形の後陣となる。天井は半円筒形トンネル・ヴォールトで、半円形の横断アーチが架かり、それをピラストルが受ける。聖堂内には彫刻装飾の類いは見られないが、内陣のベイの北側には、ヴォールトの起拱点のところに、アコーディオンのようなギザギザ形の帯装飾が描かれている。これはキュルチュール[48.6.8]にも見られるものである（ただしキュルチュールのそれは 15～16 世紀頃のものである）。



48.8.14b. La Cure

Buffière（1985）pp.271-272；Trémolet de

Villers (1998) p.382 ; Trémolet de Villers (2001) pp.38-41.

48.8.15. モルゾンノ旧ノートル＝ダム教会 (Ancienne église Notre-Dame, Molezon)

パール＝デ＝セヴェンヌから県道 D983 を南へ約 9 キロのところで県道 D61 に折れて西へ向かう。1.8 キロでビアス (Biasses) の集落に入るの、その集落の西の端にあるプロテスタント寺院の前を右 (北) に折れて 600 メートル行くと、ヴァレ＝フランセーズの山々や溪谷をなだらかに見下ろすモルゾンの旧ノートル＝ダム教会に至る。ここはパール＝デ＝セヴェンヌからサント＝クロワ＝ヴァレ＝フランセーズへと向かう山間の古い街道沿いにあたる。中世期にはビアスに城塞があった (塔が現存)。モルゾンのノートル＝ダム教会の名前は、この聖堂をマンドの司教座聖堂参事会の管理下に置くことを認めた 1123 年の教皇カリストゥス 2 世の教書の中に現れる。この地の司祭 Guillaume de Recoules はフランス国王フィリップ 4 世 (ル・ベル) とマンド司教ギヨーム・デュランの「協約」 (パレアージュ) の際の、司教側のスタッフの一人であった。セヴェンヌの他の多くの聖堂と同じく、16 世紀の宗教戦争や 18 世紀初めのカミザール戦争によって大きな被害を受けた。1702 年にル＝ボン＝ドゥ＝モンヴェールでプロテスタントによって暗殺されたシェイラ神父は、もとはここモルゾンの司祭であったこともあとと伝えられる。聖堂は修復工事の後、1804 年にはいったんプロテスタントの寺院となるが、その後は農家に買い取られ穀物倉庫や家畜小屋として使用された。しかしそのことによって荒廃と破損が進んだため、1987 年にモルゾンのコミュニオンが所有者との間で 99 年間の定期借地契約を結び、文化財保護に関わる各種団体と協力して本格的な修復に乗り出した。1990 年代に大々的な修復工事が進められ、その結果、聖堂外部のみならず、内部もきれいに修復されて現在に至っている。

モルゾンの旧ノートル＝ダム教会を訪れてまず最初に目に入るのは、西ファサードの大きなゴシック様式のポーチであろう。13～14 世紀のもので、尖頭形アーチの頭頂部はファサードの壁面のおよそ 3 分の 2 の高さまで達する。このアーチは頭頂部からわずかに末広りの台形となって地面に下りてゆく。アーチの両側には中ほどの高さのところに太いモールディングの装飾が水平に付けられている。長年にわたる改修によって、聖堂全体は凝灰岩の四角い切石積みと片岩の平積み部分が混在しているが、西ファサードのポーチは、下 3 分の 2 が凝灰岩の切石によって組まれている。このポーチは奥行きがあって、その中 (下部) に、この聖堂における数少ないロマネスク期の名残であるポルタイユが開いている。12 世紀のもので、四角い扉口の上に無装飾のリンテル、さらにそれを囲むように、やはり無装飾ではあるが力強い 3 重のヴェシュールがアーキヴォルトを形作る。アーキヴォルト



48.8.15. Molezon

のうち内側の 2 つのヴァシュールはインポストを経て、基壇の上に立つ方形の側柱が受ける。西ファサードの左右両側は、非常に厚さのある扶壁となって身廊側壁を補強している。身廊の側壁外部には北側にのみ側室が残る。かつては南側にも祭室があり、トランセプト様の仕様となっていたが、南側のそれは 20 世紀になって聖堂の横を通る道路を整備する際に取り壊されてしまった。内陣および五角形の後陣は身廊部分よりも高さが一段低いが、各面の間に大きく出張った扶壁が並んでいて、いかめしい印象を受ける。東端面および南北面、そして身廊部南側に、それぞれ半円頭形の窓が開けられている。東端面には、その窓の下に、19 世紀に農家が使用していた際に開けられた方形の出入口の跡があるが、現在は埋められている。とりわけこの後陣は（北側の祭室とともに）、片岩の積み石と凝灰岩の四角い積み石の部分が混在していて、長年にわたって繰り返された修復工事の跡が読み取れる。

聖堂内部は 1990 年代に行われた修復工事によって、白い漆喰できれいに上塗りされ整えられている。3 ベイからなる単身廊形式で（内陣を含めると 4 ベイ）、その東側に内部にあって五角形の後陣が続く。天井は半円筒形トンネル・ヴォールトで、そこに架かる半円形の横断アーチは、方形のピラストルが受け止めるが、身廊と内陣の間に架かる尖頭形の凱旋アーチを受け止めるのは、方形のピラストルとそれにペアーとなった小円柱の形のキュ・ドゥ・ランプである。その小円柱の横（内陣側）には、かつてヴォールトに架かっていた交差リブの一部が残されている。内陣と後陣の間に架かる半円形の横断アーチも床までは降りてこず、途中で小さなキュ・ドゥ・ランプが受ける。後陣は半円形で、半ドームが載る。東端の窓は、東西の中心線からは少し南側にずれたところに開けられている。身廊の東のベイではピラストルの間に尖頭形の壁アーチが付き、南側には半円頭形の窓が開き、北側の壁アーチの中には祭室が残る。さらに中央のベイでは、高さのある半円形の壁アーチが付き、南北両側に半円頭形の窓が開けられている。北側の壁アーチの下部には外部への出入口が開けられている。身廊の西端には木製の 2 階席が設けられている。

Balmelle (1945) pp.43-44; Bouvet (1995) pp.149-151; Buffière (1985) pp.273-274; Darnas et Durand (2006) pp.98-113; Trémolet de Villers (1998) p.383; *GV*; *RIP*.

48.8.16. ル・ポンピドゥー／サン＝フルール教会 (Église Saint-Flour, Le Pompidou)

フロラックから県道 D907、D983、D9 を通って南へ約 20 キロでル・ポンピドゥーの集落に至る。ガール県との県境まで 1.5 キロのところである。集落は県道 D9 に沿って家が並ぶが、集落の中ほどの所から《église de St-FLOUR》という標識に従って北に 50 メートルほど入る。すると県道 D61 と D62 が分かれる分岐点となるが、そのまま直進して民宿の建物の横の細い道を下ってゆく。およそ 1 キロほどで緑豊かな山のなだらかな斜面に建つサン＝フルール教会に至る。くるみの木々が寄り添うようにして聖堂を囲んでいる。ゴシック期の増築部分が多いにもかかわらず、ロマネスク建築の均整のとれた端正で慎ましやかな姿を今にとどめていて誠に美しい。

最初の記録は 984 年で、ニームのノートル＝ダム司教座聖堂参事会の証書の中に、この地に

聖母に捧げられた礼拝堂を建設するために土地が寄進されたという記録が見られる。その古い礼拝堂の詳細は不明であるが、現在あるサン=フルール教会は 12 世紀半ばに建設されたものである。その時代、この地はアンデューズ (Anduze) の領主の支配下にあった。14 世紀には、サン=フルール・デュ・ポンピドゥーの小修道院長として Raymond d'Anduze の名が見える。1307 年にフランス国王フィリップ 4 世 (ル・ベル) とマンド司教ギヨーム・デュランとの間で交わされた協約 (パレアージュ) においては、その証人の中にル・ポンピドゥーの司祭 Hugues de la Fare の名前が見いだせる。1365 年、ジェヴォーダン出身でアヴィニョンの教皇ウルバヌス 5 世は、ケザック (Quézac) のノートル=ダム・コレジアル教会 [48.7.13.で言及] を創建したが、その後ウルバヌスはル・ポンピドゥーの小修道院とサン=フルール教会をそのコレジアル教会の 6 人の聖堂参事会員の管理下に置いた。18 世紀初めのカミザール戦争の際には略奪・放火されたものの、ダメージは同じ被害を受けたセヴェンヌの他の聖堂と比べると少なかった。1746 年に、ケザックのコレジアル聖堂参事会によって、ル・ポンピドゥーの村に新しく聖母被昇天教会 (Église Notre-Dame-de-l'Assomption) が建てられたが、それに伴ってサン=フルール教会の方は教区教会としての役割を終え、その後は農家に買い取られて穀物倉庫や鶏舎などとして使われた。しかしそのことで荒廃が進んだため、1960 年にロゼール県の所有となり、セヴェンヌ国立公園やラングドック=ルシヨン地域圏などの公的組織の援助も加わり、修復工事が進められた。1973 年には、ドイツの Ursula Hirsch 女史の製作したステンドグラスが新たに窓にはめられた。1984 年におおよその修復工事が終わり、1992 年からは「サン=フルール・デュ・ポンピドゥー友の会」が、この聖堂でコンサートや音楽祭などを開いている。歴史的記念建造物 (monument historique) に指定されたのは 2003 年 6 月のことであった。最近 2013 年から 2017 年にかけて再び修復工事が実施され、壁の亀裂などの補修や、聖堂内部の壁面が (節度を持って) 上塗りされるなどして整えられた。

聖堂の東側は古びた墓地となっている。西側には農家が隣接しており、かつてはそこに小修道院の建物があった。全体的に、切り整えられた石灰岩の方形のきっちりとした積み石で建てられている。ただし、12 世紀の後陣の壁やポルタイユ周辺の壁などでは、大きめの切石の列と小さめの切石の列を交互に重ねていくという手法が見られる。この他、西ファサードの壁が 12 世紀のものである (農家が隣接していて、外から見ることはできない)。この西ファサードには、かつては隣接する小修道院の建物から直接聖堂内に入るための出入口があったが現在は埋められている (中からはその様子が見える)。またこの西ファサードの上にはゴシック様式の鐘楼があったが今はない。いっぽう聖堂東端は、きっちりとした石積みによる量塊感のある半円形の美しい後陣である。最上部を端正なコーニスが巡るがモディオンなどはない。このコーニスは、南壁のポーチや北東の祭室の外部に付けられているものよりも細い。このル・ポンピドゥーの後陣の意匠は、その高さは違うものの、ノートル=ダム=ドゥ=ヴァルフランセスク (Notre-Dame-de-Valfrancesque [48.8.19.]) の後陣と非常によく似ている。ル・ポンピドゥーでは、後陣に開けられた 3 つの開口部のうち、東と北のそれがロマネスク様式で、半円頭形の細長い窓である。それに対して南側の窓は半円頭形の大きなもので、アーチの内側は三つ葉形のランブラージュ (トレーサリー) で装飾されている。後陣の半円形の壁面下部の土台部

分は、壁面の強度補強のために壁面よりも少し張り出していて、一種の扶壁の役割を果たしている。聖堂の南壁には、身廊部の半分を少し超えるほどの長さ、つまり身廊の東側の第1ベイに相当する大きさの祭室（南の礼拝室）が16世紀初めに増築されていて、そこに開けられた半円頭形の非常に大きな窓が印象的である。窓のアーチの内側にはやはりゴシック様式のランブラージュが付けられている。またこの祭室の壁の積み石の表面には、それを切り出した者のさまざまな刻印（*marque de tâcheron*）が残っている。十字形、卍形、直角形あるいは三角形など。いっぽう聖堂の北側にも2つの祭室が並び、扶壁の間にゴシック様式の窓が2つ開いている。西側の窓は半円頭形で、東側の窓は尖頭形である。西が四つ葉形、東はハート形のランブラージュでそれぞれ装飾されている。



48.8.16. Le Pompidou

南壁の向かって左側（西側）には、身廊の西半分のベイ全体に相当するような大きなポーチが開いている。このポーチの正確な建設年代はよく分からないが、おおよそ14世紀頃と考えられている。このポーチを形作るわずかに尖頭形となった大きなアーチの中に、ロマネスク様式のポルタイユがあり、その斜め上に銃眼のような細くて縦長の開口部が付けられている。ポルタイユの向かってすぐ左側には、14～15世紀頃の墓石からの転用と思われる石版がはめ込まれている。そのうちのひとつは、四角いモールディングの縁取りの中に2つの花卉を左右に配した十字架が彫刻されたもので、これは、1510年に身廊第2ベイ北側の側室（北西の礼拝室）を作らせたル・マザリバル（Le Mazaribal／ル・ポンピドゥーから東へ約3キロ）の領主であった Gilles de Montgros の紋章であるという。これと同じ紋章の石版がもうひとつ、この大きなアーチの向かって左側の側壁にも埋め込まれている。またアーチの上（向かって右側）の持ち送り部分に付けられた水平のコーニスにはマルタ十字を彫刻した石版が埋め込まれているのが見えるが、この聖堂とマルタ騎士団（イエルサレムの聖ヨハネ病院騎士団）との関わりは不明である。このポーチの上には、今はないロマネスク期の鐘楼があったとも考えられている。ポルタイユはポーチの向かって右下にある。扉の上には無装飾のリンテルが載る。さらにその上はやはり無装飾の2重のヴシュールからなるアーキヴォルトとなっている。外側のヴシュールは6つの大きな組石（迫石／クラヴォー）から作られている。

ポルタイユの向かって斜め左上の細くて縦長の開口部は、身廊西側のベイの上にあたるが、内部に向けて大きく隅切りされているうえに、階段状に連続する4つ（見方によっては5つ）のアーチ（ヴシュール）が架かるという大変に珍しいもので、見た目にも美しい仕様となっている。この開口部はほとんど銃眼であるとも言えるもので、中世においてこの聖堂が半ば要塞化されていた様子もうかがえる。

聖堂内部は、2ベイからなる東西約11メートルの身廊から、その東側に短い内陣のベイ、そ

して半円形の後陣へと、高さも幅も少しずつ小さくなりながら連続する。身廊の南北両側には 15 世紀から 16 世紀にかけて増築された祭室（礼拝室）が、あたかも側廊のように並んでいる。身廊の天井はわずかに尖頭形となったトンネル・ヴォールトで、中央には方形の太い横断アーチが架かる。横断アーチは二段構えとなったカマボコ形のキュ・ドゥ・ランプが受け止める。東西幅の狭い内陣のベイの南北両側には半円頭アーチのニッチが付けられている。このうち北側のものはかつてはニッチではなく、今はない鐘楼に登るための入口となっていた。後陣は半円形で、石造りの祭壇が置かれている。水平のコーニスの上に半ドームが載る。この後陣に開けられている 3 つの窓は、先にも触れたように、東と北のそれがロマネスク様式の半円頭形の細長いものである。内部に向けて大きく隅切りされており、さらに外側をアーチで縁取りされている。窓には 1973 年のカラフルなステンドグラスがはめられている。

身廊の南北には合わせて 3 つの祭室（礼拝室）がある。北側に 2 つと身廊第 1 ベイ（東側のベイ）の南側に 1 つで、すべて尖頭アーチのアーケードを介して身廊に接続している。北東の祭室は 15 世紀に建てられたもので、別名「ウルバヌス 5 世の礼拝室」とも呼ばれる。天井は交差リブ・ヴォールトで、キュ・ドゥ・ランプがリブを受ける。交差するリブの中心の要石（クレ）と、リブを受けるインポスト（迫元またはコルボー。ここでは祭室と身廊を分けるアーケードのアーチのインポストと合体している）のひとつに、アヴィニヨンの教皇ウルバヌス 5 世の紋章が彫刻されている。ギザギサ文様と、その上に聖ペトロのアトリビュートでもある 2 本の鍵が交差する形で置かれるというもので、特にリブ・ヴォールトの要石のそれは、大きく下に出張り、八角形の星形装飾がウルバヌスの紋章の周囲を飾るという豪華なものである（ただし多少とも摩耗している）。それ以外のインポストには植物文様や人面などの彫刻が見られる。かつては、教皇ウルバヌスが 14 世紀にこの祭室を作らせたのではないかとの見方もあったが、実際にはウルバヌスが 1365 年に創建したケザックのコレジアル教会の聖堂参事会（シャピトル）によって、ウルバヌスを顕彰するために建てられたものであった。もともとここには聖遺物が置かれた部屋があったようであるが、聖遺物自体は 14 世紀に失われてしまったという。祭室の東側の壁の下部には、オジー・アーチ（弓形尖頭形）が架かるニッチが付けられている。また外側がゴシック様式のランブラージュで装飾された尖頭形の大きな窓が開けられている。

「ウルバヌス 5 世の礼拝室」から尖頭形のアーチを介して西に続く祭室（北西の礼拝室）は、1510 年に、ル・マザリバルの領主であった Gilles de Montgros によって建てられたものである。彼の紋章は、先にも触れたように聖堂南側のポーチに埋め込まれている。天井はやはり交差リブ・ヴォールトで、リブはそのまま壁付きの細い円柱となって基壇まで下りるが、南東端のリブだけは、天使が彫刻されたキュ・ドゥ・ランプが受ける形で途中で止まっている。この祭室の上にはかつては鐘楼があったようで（ただしロマネスク期のものではない）、鐘に繋がっていたロープの穴がヴォールトに残っている。現在この聖堂には鐘楼はない。身廊をはさんで第 1 ベイの南側にある祭室（南の礼拝室）は、北西の祭室と同じく 16 世紀初め頃に建設されたもので、天井はやはり交差リブ・ヴォールトである。リブはすべてキュ・ドゥ・ランプが受け止めている。東側の壁と南側の壁にニッチが付けられている。東側の壁のニッチの上部はオジー・アーチである。窓は半円頭形の大きなもので、外側にランブラージュが施されている。

以上の3つの祭室の増築は、15世紀から16世紀にかけてのことであるが、その理由はあまり明らかなことではない。15世紀までこの地方は戦乱やペストなどの疫病のために大幅な人口減少が続いた。人口がゆるやかに増加に転ずるのは15世紀終わり～16世紀頃からで、人口増加が祭室の増築の直接の理由であるようには思われない。

ル・ポンピドゥーのサン＝フルール教会の聖堂建築は、全体としてセヴェンヌにある他の聖堂群のうち、バール＝デ＝セヴェンヌ、サント＝クロワ＝ヴァレ＝フランセーズ、ノートル＝ダム＝ドゥ＝ヴァルフランセスクなどの聖堂とよく似ていると言われる。これらはタイプとしてはプロヴァンスからの影響が大きいものである。一般的に、ジェヴォーダンとりわけここセヴェンヌ地方のロマネスク聖堂は、比較的大きな切石による規則正しい石積みや、聖堂が捧げられている聖人などを見るとオーヴェルニュの影響も強いが、平面プランなどの聖堂建築のさまざまな要素という点ではプロヴァンスの影響が大きい。オーヴェルニュとプロヴァンスの文化的融合の一端が、ここセヴェンヌのル・ポンピドゥーにおいてもはっきりと認められるのである。Balmelle (1945) pp.49-50; Buffière (1985) p.275. pp.549-550; Chastel (1981) p.19; Darnas et Durand (2006) pp.12-29; Nougaret et Saint-Jean (1991) p.295; Pages (1999) pp.10-24; Travier (1999) pp.25-27; Trémolet de Villers (1998) pp.389-391; *GV; RIP*.

48.8.17a. サン＝マルタン＝ドゥ＝ランスュスクル／サン＝ピエール＝エ＝サン＝ポール教会

(Église Saint-Pierre et Saint-Paul, Saint-Martin-de-Lansuscle)

バール＝デ＝セヴェンヌから県道 D13 で東へ 14 キロで県道 D28 を南に入り、およそ 4 キロでサン＝マルタン＝ドゥ＝ランスュスクルの集落に至る。サン＝ピエール＝エ＝サン＝ポール教会（または単にサン＝マルタン＝ドゥ＝ランスュスクル教会）は、県道沿いに並ぶ家々を西側から見下ろすように、一段高いところに建っている。この聖堂の歴史についてはあまり多くのことは知られていない。12世紀頃には、この地はアンデューズのパロニーにあって、ここから直線距離にして約2キロにあるフオンタニユ (Fontanilles) の城の領主の支配下にあった。1703年、カミザール戦争の際に司祭館とともに破壊・放火された。その後、ロマネスク様式の姿をある程度とどめる形で再建された。

聖堂は南側が墓地となっている。この墓地に面してポーチが付き、その中に簡素な半円頭形のポルタイユが開いている。扶壁の付けられた身廊に、南北両側の祭室が加えられていて、東端には半円形の後陣が続く。後陣は外側から見ると高さがあって、東にロマネスク様式の窓、南にランブラージュで装飾されたゴシック様式の窓が開いている。聖堂全体が平たい片岩を積むことで建てられているが、部分的に漆喰で上塗りされているので、石積みの様子がもっともよく分かるのはこの後陣部分である。鐘楼は聖堂北側の祭室の上に立っている。聖堂内部は3ベイからなる単身廊形式で、天井は半円筒形トンネル・ヴォールトである。ベイの間に架かる横断アーチはピラストルが受ける。内陣のベイの両側には、天井が半円筒形ヴォールトとなった祭室が付けられている。後陣は半円形で水平のコーニスの上に半ドームが載る。

なおサン＝マルタン＝ドゥ＝ランスススクルには、ここから約 3 キロ北の山中にあるサン＝クレマン（Saint-Clément）と呼ばれる場所に、1970 年代になって発掘されたガロ＝ローマ時代のヴィラの遺構が残っている。紀元 2 世紀頃のものと考えられ、セヴェンヌ地方では珍しい古代の遺構である。平野部で見つかるような大規模なものではないが、床下暖房設備などを備えている。

Balmelle (1945) p.69; Buffière (1985) pp.1477-1478; Trémolet de Villers (1998) p.384; Trintignac (2012) pp.464-467.

48.8.17b. サン＝マルタン＝ドゥ＝ランスススクル／フォンタニユーの城塞礼拝堂

(Chapelle castrale de La Tour de Fontanilles, Saint-Martin-de-Lansuscle) 遺構▲

バル＝デ＝セヴェンヌから県道 D13 を東へ 12 キロでノガレ（Nogaret）の集落であるが、そこから南に下りる細い道を進み、1 キロほど行くと農家が 1 軒だけあるフォンタニユーと呼ばれる地区に着く。すぐ北はル・プラン（Le Plan）地区である。そのどちらからアクセスするにせよ、さらに 1 キロほど山道を登った標高 800 メートルの山頂に、かつて 12 世紀にサン＝マルタン＝ドゥ＝ランスススクルとその近隣地域を支配していたフォンタニユーの城塞の遺構が残っている。城塞の遺構と言っても、それは実際には城塞礼拝堂の建物の遺構である。城の主は、アンデューズのパロニーの配下にあったフォンタニユー族と伝えられるが、共同領主として他の一族の名前も伝わっている。城は 15 世紀の間に放棄されたようである。ここから北に 500 メートルほどの、より開けた場所にコーヴェル城（Château du Cauvel）が、やはりフォンタニユー族によって建てられているので、山の上の手狭な城から、より居住性の良い城へと移ったものと思われる。

現在残るフォンタニユーの城塞礼拝堂は、2 ベイの短い身廊に半円形の後陣が付く小さなものである。後陣には南側に 1 カ所だけ縦長の細い窓が開けられている。平たい片岩を積んで建てられており、後陣の外観などは、サン＝ジュリアン＝デュ＝トゥルネルの城塞礼拝堂 [48.4.12b.] とよく似ている。かつてのフォンタニユー城塞については、崩れかけた壁の一部だけが礼拝堂の北壁の上に残っているが、このままでは残された礼拝堂のヴォールトなどと共に崩落が心配されるところである。

Trémolet de Villers (1998) p.384; Web-site : La Tour de Fontanilles, Castrum de Guilhem de Fontanilles.

48.8.18. サント＝クロワ＝ヴァレ＝フランセーズ／サント＝クロワ教会

(Église Sainte-Croix, Sainte-Croix-Vallée-Française)

ル・ボンビドゥーから県道 D9 を東へ 2 キロで県道 D24 に入り、そこから約 7 キロ。サン＝マルタン＝ドゥ＝ランスススクルからだ県道 D28 で南へ約 8 キロである。サント＝クロワ教会は、集落の中ほどの、県道 D40 と D24 が交わる場所にある小さな岩丘の上にあって道路や

集落を見下ろすようにして建っている。12 世紀、この岩丘にはアンデューズの領主の支配する城塞があり、サント＝クロワ教会はもともとはその城塞礼拝堂であった。旧司祭館でもあった隣接する村役場の建物はその城塞の跡に建てられたものである。またこの地にあったサント＝クロワ小修道院は、13 世紀後半にはマンドの司教座聖堂参事会の管理下に置かれていた。15 世紀になって教皇シクストゥス 4 世により、ベドゥエスのコレジアルのもとに移管されている。宗教戦争の際にプロテスタントによって攻撃され被害を受けた。その後再建され、17 世紀半ばには一時的にプロテスタントの寺院となっていたにもかかわらず、1703 年 1 月にはカミザール戦争によって略奪・放火の憂き目に遭っている。その理由ははっきりしないが、いずれにせよそうした被害はセヴェンヌにある他の聖堂に比べると、ここでは軽いものであったとされている。1712 年から修復工事が進められた。

サント＝クロワ教会は、11 世紀後半あるいは 12 世紀初め頃の建設で、セヴェンヌでも最も古いものの 1 つである。黒っぽい片岩の積み石で建てられていて、厳めしいと同時にきりりと引き締まった印象を与える。ロマネスク期の部分がよく保存されており、西ファサードなどを除くと、ゴシック期以降に改築・増築された部分は少ない。西ファサードは 18 世紀から 19 世紀にかけて改築された。この西ファサードの下半分には中央に 17 世紀以降に付けられたポーチがある。外側が方形で内側が半円頭形のアーチとなっており、そのアーチの中にやはり半円頭形のボルタイユが開く。ポーチの上には長方形の窓があり、一番上に立つ背の高いすらりとした鐘楼は 19 世紀終わりあるいは 20 世紀初め頃のものである。この鐘楼には鐘が 1 つだけ吊されており、頂部は水平である。

この聖堂を東から見ると、半円形の後陣と共に、向かってその右（北）側に後陣と同じくらいの大きさの側室（聖具室）が並んでいる。後陣の東端には外側に向けて隅切りされた半円頭形で細長くて小さなロマネスク様式の窓が開けられ、側室の東壁にも同様に小さくて細長い窓が開いている。後陣の窓の隅切り上部のアーチは片岩のクラヴォー（迫石）が組まれているものであるが、側室の窓の方は、隅切りの上部が半円形の花崗岩の杵石（リンテル）である。この側室の北側に開けられた窓もやはり隅切りされた半円頭形の細長いものであるが、隅切り上部のアーチは 4 つの石灰岩のクラヴォーから組まれている。後陣の南側にはもともとはやはりロマネスク様式の細長い窓が開けられていたが、18 世紀あるいは 19 世紀になって大きな窓へと広げられた。聖堂の身廊部南側に開けられている窓も同様である。聖堂の側壁は、南北共に片岩の石積みによる扶壁で補強されているが、とりわけ内陣の北に増築された側室に付けられた 2 つの扶壁は他の扶壁よりも分厚くて力強く、そのため北側からこの聖堂を見た時の印象がいつそう厳めしいものとなっている。

聖堂内部は、天井が半円筒形トンネル・ヴォールトとなった単身廊形式で、2 ペイからなる（東



48.8.18.
Sainte-Croix-Vallée-Française

西幅の短い内陣を含めると 3 ベイ)。横断アーチはやはり片岩が積まれた方形のピラストルが受ける。このピラストル以外の壁面はすべて漆喰で上塗りされている(側壁部分は薄い茶色、ヴォールト部分は白)。身廊南側の壁には 2 つのベイにそれぞれ 1 つずつ内部に向けて隅切りされた半円頭形の大きな窓が開けられ、採光の役割を果たしている。後陣は半円形で、身廊から続く水平のコーニスの上に半ドームが載る。東の細長い窓はロマnescク様式で、南側にはそれよりも大きな半円頭形の窓が開けられている。共に内部に向けて隅切りされている。身廊の北側には、先にも触れたように大きな方形の祭室があるが、内部からは直接にその祭室を目にすることができない。内陣のベイから身廊部東側の第 1 ベイの中ほどまでに相当する身廊北側部分が、聖母マリアの祭壇が置かれている背の低いアーケード状の小さな祭室となっており、その奥にある小さな扉を介して、方形の大きな祭室の中に入るようになっている。現在その部屋は聖具室となっている。

Balmelle (1945) p.61; Buffière (1985) p.276., pp.548-549; Trémolet de Villers (1998) pp.385-386; *GV*.

48.8.19. モワサック=ヴァレ=フランセーズ/ノートル=ダム=ドゥ=ヴァルフランセスク旧教会 (Ancienne église Notre-Dame-de-Valfrancesque, Moissac-Vallée-Française)

サント=クロワ=ヴァレ=フランセーズから県道 D983 を東へおよそ 5 キロである。セヴェンヌ山地をガルドン川の支流 (Gardon de Sainte-Croix) に沿って、パール=デ=セヴェンヌからサント=クロワ、モワサック、サン=テティエンヌへと続く渓谷であるヴァレ=フランセーズの名前の由来は、中世初期 (カロリング時代) に、イベリア半島を支配し南フランスまで侵略の手を伸ばしていたイスラーム勢力に対してフランク人がこの地域に進出し足場を築いて対抗した名残り、すなわち「フランク人の渓谷」と呼ばれていたのだとされる。この地に最初に聖堂 (ノートル=ダム=ドゥ=ラ=ヴィクトワール) が建てられたのはカロリング時代後半の 10 世紀のことであったが、それはシャルルマーニュ、あるいは伝説上彼の甥とされることもあるローランが、この谷でイスラーム軍に対して戦いを挑みこれに勝利したことを記念したものであったとも言われる。ただしこうしたことは伝説の域を出るものではなく確かなことは分らない。いずれにしてもこの聖堂は、史料によれば 10 世紀に教皇ヨハネス 11 世 (在位 931-936 年) がニーム司教レナール (Rainard/Raynald) に与えたことが知られている。その後、サン=ジル修道院やソーヴ修道院 (共に現在のガール県) の管理下に移された。カロリング時代のこの古い聖堂に代わって、1063 年に新たな聖堂が建設・献堂された記録があるが、現在われわれが目にするノートル=ダム教会の建設は、さらに後の 12 世紀後半のことと考えられている (しかしやはり 10 世紀~11 世紀とする見方もある)。16 世紀の宗教戦争によって被害を受け、1640 年にはいったん修復されるが、カミザール戦争の際、1702 年 (または 1703 年) に付属する司祭館とともに放火・破壊された。フランス革命勃発後は、1792 年に完全に放棄され、1793 年には鐘が取り外されて溶かされた。1796 年に国有財産として売却され、一時的に農家の所有となるが、その後 1823 年になってプロテスタント寺院として買い

戻され復活した。歴史的記念建造物（Monument Historique）に指定されたのは 1929 年のことである。1990 年代にも修復工事が行われ、今日ではプロテスタントの礼拝の他、コンサートや展覧会その他の各種イベントに利用されている。

ノートル＝ダム＝ドゥ＝ヴァルフランセスク旧教会は別名「ボワソナードのプロテスタント寺院」（Temple de la Boissonnade）とも呼ばれ、県道 D983 沿い（北側）の一段高くなっているところに建っている。建物の主要部分（特に後陣）は、四角く切り整えられた色の濃い花崗岩（kersantite noire）のきっちりとした石積みによるもので、部分的に異なる石積みの仕様が組み合わされているものの、全体的に均整がとれ、しかもたび重なる被害にもかかわらず 11 世紀～12 世紀の建築がよく保存されていて、ロマネスク聖堂の美しさと魅力を大変よく感じさせるものとなっている。聖堂は東西の長さが 23 メートル、南北の幅が 6 メートルで、南北両側の側壁は力強い扶壁で補強されている。西ファサードも左右両側が太い扶壁となっている。その左右の扶壁にはさまれて、西ファサード全面に、あたかも聖堂内部の身廊の断面をそのまま型取ったかのように、地面から三角形の切妻の頭頂部近くまで立ち上がる大きな半円頭形の壁アーチが付けられている。その中に開けられているポルタイユには、クラヴォーが扇型に組まれた半円頭アーチが架かる。タンパン彫刻はないが、無装飾のリンテルが扉口の両側の側柱の上に置かれている。ポルタイユの上には、半円頭形で外部と内部の両方に向けて二重に隅切りされたロマネスク様式の美しい窓が開けられている。この西ファサードの下 3 分の 1 の基壇部分は、大きな花崗岩の四角い切石が積まれているが、中ほどと上 3 分の 1 においては切石はより小さなものとなり、しかもそれぞれ異なる仕様の石積みとなっている。西ファサードの一番上に立つ鐘楼（鐘を吊すベイは 1 つだけ）は、近代になってからのものである。

聖堂の南側に回ると、2 本の扶壁の間に、外側が方形で内側が大きな半円形のアーチとなったポーチが付けられており（それ自体が扶壁の役割を果たしている）、その中に、現在使われているポルタイユが開く。二重のヴシュールが上に架かり、タンパンはなく、ここでも無装飾のリンテルが扉口左右に立つ方形の側柱によって支えられている。このヴシュールは、かつては左右それぞれで 2 本ずつの小円柱が受けていたが、その円柱は 17 世紀にガブリアック（Gabriac）の領主によって持ち去られたために失われており、ヴシュールと側柱の間に、彫刻の施された石灰岩のインポストだけが残されている。それらの彫刻は、放射状に葉を広げるアカンサス、あるいは渦巻き状のアカンサスの葉飾りである。インポストのこの彫刻には、小さな穿孔がいくつも開けられていて、Zodiaque によれば、それはサン＝ジルやサン＝ギレーム＝ル＝デゼールなど、南フランス地中海沿岸地域の影響を思い起こさせるものであるという。ポーチの向かって斜め右上と、扶壁を挟んだ次のベイには、隅切りされた半円頭形の小さなロマネスク様式の窓が開けられて



48.8.19. Notre-Dame-de-Valfrancesque

いる。後陣は半円形で、きれいに切り整えられた石積みである。東側と南側に、隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。後陣および側壁の持ち送りにはモディオンなどは見られない。後陣から北側に回ると、後陣部のすぐ西、つまり内陣のベイに、小さな方形の建物が付けられているが、これはかつての鐘塔の基壇にあたり、その鐘塔が 18 世紀に打ち壊された後は聖具室として使用されているものである。その建物から西の側壁には、3 つの扶壁がほぼ等間隔で並んでいる。この北側の壁には開口部（窓）は見られない。

聖堂内部はシンプルな単身廊形式で、3 ベイからなる身廊の天井は半円筒形トンネル・ヴォールトである。身廊の東には、東西の幅が短くて身廊よりもヴォールトの位置が低い内陣のベイと、さらにそれよりも高さや幅が一段縮小した半円形の後陣が続く。この後陣には東側と南側に隅切りされたロマネスク様式の端正な窓があげられている。後陣には水平のコーニスの上に半ドームが載る。身廊のヴォールトの起点となるコーニスの位置は、内陣・後陣のそれよりも高い位置にある。身廊のヴォールトには半円形の横断アーチが架かり、方形のピラストルがそれを受ける。ただし、西側の横断アーチを受ける南壁のピラストルは、ポルタイユの半円形のアーチの真上までで止まっている。身廊の第 1 ベイ（最も東のベイ）には、接続する内陣のすぐ隣に、聖具室（かつての鐘塔の基壇にあたる建物）に出入りするための背の高い扉口があり、一番上には半円アーチが架かる。身廊の西端の壁（つまり西ファサードの内側）には、半円頭形の出入口が付けられており、木製の扉がはめ込まれているが、現在はあまり使用されていない。この壁の上部には、半円形のアーチに縁取りされた半円頭形の隅切りされた窓が開けられている。同様の窓は身廊南側の壁にも 2 カ所開けられており、これらの窓は先にも触れたように、外側と内側の両方に向けて二重に隅切りされており、ロマネスク様式の美しさを今によく伝えるものとなっている。

Balmelle (1945) p.43 ; Buffière (1985) p.1473 ; Chastel (1981) p.23 ; Darnas et Durand (2006) pp.64-81 ; Durliat (1966) pp.86-87 ; Nougaret et Saint-Jean (1991) p.292 ; Trémolet de Villers (1998) pp.386-388 ; Verrot (1994) p.10 ; *GV*; *RIP*.

48.8.20. サン=テティエンヌ=ヴァレ=フランセーズ／サン=テティエンヌ教区教会

(Église paroissiale de Saint-Étienne, Saint-Étienne-Vallée-Française)

モワサック=ヴァレ=フランセーズのノートル=ダム=ドゥ=ヴァルフランセスク旧教会 [48.8.19.] から県道 D983 を東へ約 9 キロのところまで北へ折れ、県道 D984 を 1.5 キロ進むとサン=テティエンヌ=ヴァレ=フランセーズに至る。サン=テティエンヌ教区教会は、県道 D984 の西側の集落の真ん中に建っている。12 世紀頃、この地はアンデューズの領主が支配するフロラックのバロニーのうちにあり、ここにあったベネディクト派の小修道院は、ソーヴ修道院（現ガール県。ただし現存せず）に属していた。13 世紀前半、異端カタリ派掃討に成功したフランス王権がこの地にパイイ（代官）の拠点を置いた。16 世紀の宗教戦争の際には聖堂は集落とともにかなり被害を受けた。17 世紀後半になると、ナントの勅令廃止に伴って、プロテスタントからカトリックに改宗した人々を収容するために拡張工事が行われ、身廊が延長され、

聖具室とともに 2 つの礼拝室が身廊の南北に新たに増築された。現在残る建物は、この時の改築・増築によるものである。18 世紀初めのカミザール戦争の際には、集落は大きな被害を受けたが、教区教会自体はあまりダメージを受けなかったようである。

聖堂は 17 世紀に改築・増築された部分が大半となる。身廊の南北には 17 世紀以降に増築された祭室が並び、高さのある後陣は五角形で、北東と南東の 2 カ所にわずかに尖頭形となった大きな窓が開けられている。壁面は片岩の平積みと大小の不規則な形の石による乱積み部分が入り交じっている。この後陣にはモディオンその他の装飾的要素は見られない。より歴史を感じさせるのは西ファサードである。西ファサードの向かって右側には、上部に 4 分の 1 アーチが残る壁面が残り、そこから聖堂南側に向けて古い石積みを見ることが出来るが、これは 17 世紀以前の古い建築の名残であるとも言われる。西ファサードの上半分は、2 本のモールディングによって 3 段構えとなった厳めしい方形の鐘塔である。鐘塔の西面においては、上の 2 段に、鐘を吊すベイが 2 つずつ並ぶ。西ファサードの下半分は、上半分とは異なる方形のきっちりした石積みで、尖頭形の窓を挟んで、その下に半円頭形のポルタイユが開く。尖頭形の窓には方形と円筒形のヴシュールが架かり、それを左右でそれぞれ 2 本ずつの細長い小円柱が受ける。その小円柱の柱頭には簡素な幾何学的文様が彫刻されている。これもまた 17 世紀以前のものとされる。ポルタイユは 19 世紀の新しいもので、方形の側柱の上に半円形のアーチが架かる。

聖堂内部はやはり新しい。尖頭形のトンネル・ヴォールトが架かる身廊の南側には、2 つの祭室が側廊のような形で接続する。身廊との間にあるアーケードのアーチは、南西側の祭室では尖頭形、南東側の祭室では大きな半円形である。やはり大きな半円アーチを介して身廊と接続する北側の祭室も含めて、それらの祭室の天井は交差ヴォールトである。身廊にはピラストルの上に 2 本の横断アーチが架かり、身廊と内陣、そして後陣を分けている。後陣は五角形で半ドームが載る。内部に向けて大きく隅切りされた尖頭形の窓が内陣の南側、そして後陣の北東と南東の 2 カ所に開いている。身廊は、ヴォールトの起点部を水平に延びるコーニスを境にして、上のヴォールト部分は白く、また下のアーケードと壁面部分は薄い黄色の漆喰できれいに上塗りされている。

Trémolet de Villers (1998) p.425 ; *RIP*.

48.8.21a. サン=ジェルマン=ドウ=カルベルト／サン=ジェルマン教会

(Église Saint-Germain, Saint-Germain-de-Calberte)

サン=ティエンヌ=ヴァレ=フランセーズから県道 D984 を北へ 8.5 キロ、サン=ティレール=ドウ=ラヴィからは同じく県道 D984 を南へ約 10 キロである。サン=ジェルマン教会は、村のほぼ中央に建っている。12 世紀にはここに、ソーヴ修道院（現ガール県）に属する古い聖堂があったが、14 世紀にアヴィニヨンの教皇ウルバヌス 5 世がゴシック様式で新しい聖堂を建て直した。ウルバヌスはこの地に修道士のための学寮（*Studium*）も建てている。16 世紀の宗教戦争の際には、この教会は一時的にプロテスタントの寺院として使用された。またその間に調

度品や聖具類などが失われた。1686年にここサン＝ジェルマン教会の司祭に任じられていたシェイラ神父は、この地に司祭養成のための神学校 (séminaire) を建てるなどしていたが、1702年にル＝ボン＝ドゥ＝モンヴェールでプロテスタントに襲撃されて殺され、これが引き金となってカミザール戦争が勃発した。暗殺後、彼はこのサン＝ジェルマン教会に葬られたのであった。カミザール戦争の際には大きな被害は受けなかったものの、フランス革命の時に破壊と略奪が行われ、鐘塔もその時に打ち壊された。荒れたまま放置されていた聖堂は、1801年のコンコルダ (政教協約) によって祈りの場として復活し、修復工事なども重ねられて今日に至っている。

サン＝ジェルマン教会は、全体が片岩の石積みで建てられている。ロマネスク様式を保っているものの、ゴシック期以降の改修・改築の手がかなり入っており、20世紀の西ファサードの外観や、漆喰で上塗りされた壁面 (身廊南壁を除く) などによって、一見してあまり古さを感じさせない。それを最も感じさせるのは後陣から身廊南側にかけての外観である。後陣は五角形で、中央の3つの面にわずかに尖頭形となったゴシック様式の大きな窓が開く。中央の面の下には近代になって開けられた扉口がある。片岩の石積みがそのまま残されている身廊部南壁にはゴシック期以降に増築された側室 (祭室) と扶壁が並ぶ。それぞれの側室には尖頭形の大きな窓が開けられている。一方、聖堂北側の壁には開口部はまったく見当たらない。西ファサードはゴシック様式であるが、20世紀初頭になって頂部が尖塔となった方形の鐘楼が載せられた。この西ファサードは、全体がポーチとなっていて、鐘楼のすぐ下に小さなニッチの尖頭アーチがあり、その下を開く大きな尖頭アーチの中に15世紀のポルタイユが付けられている。扉の上には無彫刻のタンパンを囲むようにして3重の尖頭形ヴシュールが架かり、一番外側は細いモールディングでさらに縁取られている。ヴシュールは植物文様の彫刻 (ただしかなり摩耗している) の施されたインポスト (柱頭) を介して、左右でそれぞれ3本ずつの細長い円柱が受け止める。長方形の扉口もそれらの円柱と同じ仕様のモールディングで縁取られ、左右の側柱の頂部はヴシュールを受けるインポストと連続して、やはり同じ植物文様の彫刻が付けられている。扉口にはトリュモー (扉口を二分する中央柱) があるが、その柱頭彫刻は摩耗していて判然としない。

聖堂内部は単身廊形式で、身廊の北に1つ、南に4つの側室 (祭室) があり、特に南側では尖頭形のアーケードの形を取って、祭室がずらりと並んでいる。すべて尖頭形のヴォールトが架かる。身廊は小さなモディオンが並ぶ水平のコーニスの上に尖頭形のトンネル・ヴォールトが架かる。4つのベイからなり、それを分ける尖頭形の横断アーチは非常に大きい。それらは片岩の石積みによる太いピラストルが受け止めている。後陣は外部は五角形であるが、内部は半円形となり、半ドームが載る。中央には内部に向けて隅切りされた尖頭形の窓が開けられていて、21世紀になってから作られたステンドグラスがはめられている。身廊北側の中ほどに、シェイラ神父が作らせたという17世紀の木製の説教壇がある。側面のパネルには四大福音書記者や唐草文様が彫刻されている。フランス革命の際の混乱によっても失われなかった貴重なものである。

Balmelle (1945) p.65 ; Buffière (1985) p.1470 ; Chastel (1981) p.27 ; *Revue du Gévaudan* (1980) pp.45-46 ;GV; RIP.

48.8.21b. カルベルトの城塞礼拝堂

(Chapelle castrale de Calberte, Saint-Germain-de-Calberte)

カルベルトの城は、別名サン=ピエール城とも呼ばれる。サン=ジェルマン=ドゥ=カルベルトから北東へ直線距離にして約 1.5 キロの山の頂きにある。県道を通っていく場合は、サン=ジェルマン=ドゥ=カルベルトから D13 をおよそ 3 キロほど西へ登ったところで道が急カーヴするので、そこから徒歩でさらに 500 メートルほど山道を登る。現在この城は個人所有となっている。史料にその名が最初に現れるのは 1092 年で、アンデューズの領主によって建設されたとされる。それから 12 世紀にかけて本格的な城塞としての体裁を整えていった。13 世紀、このアンデューズの領主はアルビジョア十字軍による異端カタリ派討伐の際にトゥールーズ伯の側に与していたために、十字軍終了後にフランス国王がこの城を接收し、1307 年にマンド司教との間で取り交わされた「協約」（パレアージュ）でそれが確認された。城の実際の支配はポルト（Portes／現ガール県）の領主に委ねられたが、その後は百年戦争の混乱を経てビュドス（Budos／現ジロンド県）の領主がこれを手に入れて支配した。しかしながら 15 世紀には放棄されたようである。その理由ははっきりしないが、16 世紀半ばにはすでに廃墟化していた。20 世紀に入って考古学的調査と共に少しずつ修復作業が進められており、現在では夏期に限り、観光客の見学を受け入れている。

城全体は、長方形の居館、方形のドンジョン（主塔）、円塔、そして城塞礼拝堂などから構成される。礼拝堂はサン=ピエール礼拝堂とも呼ばれ、居館に隣接して城の東側に後陣が飛び出すようにして建てられている。かなり崩れていたものが、1978～1983 年に行われた修復工事によってかつての姿を取り戻した。壁は片岩の平積みである。身廊部外側の側壁の東端には南北両側に扶壁が付けられている。ポルタイユは南壁にあって、その上には、片岩を半円形の扇状に組み並べたアーチが架かる。ポルタイユの向かって右側には細長い長方形の開口部（銃眼）が付けられている。ポルタイユが開くこの南壁の上部には、巨大なメルロンのような大きさが異なる壁体が 2 つ立ち上がり、その間に鐘が吊されている。礼拝堂内部は半円筒形のトンネル・ヴォールトが架かる短い単身廊で、側壁には半円形の壁アーチが南北それぞれに 2 つずつ付いている。後陣は半円形で、中央には内部に向けて大きく隅切りされた半円頭形の細長い銃眼のような窓が開いている。その窓の向かって右側には半円アーチの小さなニッチが付けられている。通常のロマネスク聖堂では後陣の上には石造りの半ドームが載るが、現在は木像の骨組みによる屋根が付けられている。

なおこの城の北側の城壁の外には、十数戸の住居からなる集落の遺構が残されている。城が放棄される少し前の 14 世紀にはこの集落の住民もいなくなり、その後は荒れ果てて廃墟となってしまったようである。

Darnas (1992) pp.97-102 ; *GV; RIP*.

参考文献と略記号

- Balmelle, Marius (1945) : *Répertoire archéologique du Département de La Lozère, Périodes Wisigothique, Carolingienne et Romane*, Mende, Imprimerie G. Pauc.
- Bouvet, Danièle (1995) : “Molezon” , dans *La sauvegard de l'art français, Cahier 8*, Paris, Picard.
- Buffière, Felix (1985) : *《ce tant rude》Gévaudan*, tome 1 et tome 2, Mende, Société des Lettres, Sciences et Arts de la Lozère.
- Chastel, Rémy (1981) : *Églises de Lozère*, Paris, Art et Tourisme.
- Darnas, Isabelle (1992) : “Le castrum de Calberte : Étude du quartier nord-ouest (Saint-Germain-de-Calberte, Lozère)” , *Archéologie du Midi médiéval*, tome 10.
- Darnas, Isabelle et Durand, Geneviève (2006) : *Itinéraire Roman en Cévennes*, Saint- Gély-du-Fesc, La Voix Domitienne.
- Brouillet, Pierre (1986) : “Les monographies lozériennes par Léon Denisy (1818-1888)” , dans *Revue du Gévaudan* (1986) , no.4, Mende, Imprimerie H. Chaptal.
- Durlat, Marcel, et al. (1966) : *Dictionnaire des Églises de France, Ilc, Cévennes, Languedoc, Roussillon*, Paris, Robert Laffont.
- Hélas, Jean-Claude (1995) : “Gap-Francès : La seigneurie et les revenus de la terre (XVe siècle)” , dans *Provence Historique*, Tome 45, fascicule 179.
- Nougaret, Jean et Saint-Jean, Robert (1991) : *Vivaraïs Gévaudan Romans*. Saint-Léger-Vauban, Zodiaque.
- Pages, Henri (1999) : “Le circuit des églises romanes cévenoles” , dans *Causses et Cévennes, Revue du Club cévenol*, tome XIX, No.1, Alès.
- Stevenson, Robert Louis (1960) : *An Inland Voyage, Travels with a Donkey, The Silverado Squatters*, J. M. Dent & Sons, London. 邦訳：ロバート・ルイス・スティーヴンソン『旅は驢馬をつれて』吉田健一訳、岩波文庫、1951年。
- Travier, Daniel (1999) : “Le circuit des églises romanes cévenoles” , dans *Causses et Cévennes, Revue du Club cévenol*, tome XIX, No.1, Alès.
- Trémolet de Villers, Anne (1998) : *Églises Romanes oubliées du Gévaudan*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.
- (2001) : “Barre-des-Cévennes” , dans *La sauvegard de l'art français, Cahier 14*, Paris, Faton.
- Trintignac, Alain (2012) : *Carte Archéologique de la Gaule, 48, La Lozère*. Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, Paris.
- Verrot, Michel (1994) : *Églises rurales & décors peints en Lozère*, Chanac, La Régordane.
- Werth, François (2013) : *Le patrimoine caché et meconnu en Languedoc-Roussillon*, Rennes, Ouest-France.
- カヴァリエ (2012) : 『フランス・プロテスタントの反乱ーカミザール戦争の記録』二宮フサ訳、岩波文庫、2012年。

Revue du Gévaudan（1980）, no.3, Mende, Imprimerie H. Chaptal.

GV. : Guide de Visite.

RIP. : Renseignements ou Informations sur Place.

Web-site

La Tour de Fontanilles, Castrum de Guilhem de Fontanille

(<http://latourdefontanille.blogspot.com/>) 2019.11.01 アクセス

BM. : La Base Mérimée. (<http://www.culture.gouv.fr/culture/inventai/patrimoine/>) 2019.10.1 アクセス

FSAF. : La Fondation pour sauvegarde de l'art français

(<http://www.sauvegardeartfrancais.fr>) 2019.9.1 アクセス